Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-11

テレビ・ドキュメンタリーにおける不登校の描かれかた ： 定義・原因・対策をめぐる映像戦略

原賀, 諒

(Citation)
日本文化論年報,26:49*-125*

(Issue Date)
2023-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100481682

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481682

テレビ・ドキュメンタリーにおける不登校の描かれかた―定義・原因・対策をめぐる映像戦略

原　賀　　諒

序論

研究の目的

この研究の目的は、映画学的な手法を用いて、テレビ・ドキュメンタリー『NHK スペシャル シリーズ子どもの“声なき声”第２回「“不登校”44 万人の衝撃」』（以下『“不登校”44 万人の衝撃』）の分析を行い、当作品の制作者が不登校問題をどのように伝えようとしているのか明らかにすることである。ところで、映画における演出はミザンセン（仏：*mise-en-scène*）と呼ばれ、セッティング、衣装とメーキャップ、照明、人物の振る舞いといった構成要素の総括によって展開される（Bordwell and Thompson 2009）。映画学的な手法に基づく映像分析では、映像製作者がこれらの要素を調整して用いることで視聴者に届けようとしているメッセージがいかなるものであるのかを読み解いていく。さて、自著で映画学を体系的にまとめて解説したボードウェルとトンプソンによれば、一見事実を伝えているだけのように思われるドキュメンタリーの中でも殆どのタイプの作品で演出が施されている。つまるところドキュメンタリーの制作者は、演出を通して事実の伝え方を工夫することで視聴者に抱かせる印象を操ろうとするということである。したがって本稿では、演出に着目した映像分析を行うことによって、『“不登校”44 万人の衝撃』の制作者がどのような意図や主張を伝達しようとして不登校問題の描写を試みているのか考察する。

研究の動機

不登校（登校拒否）であったとされる人物を数えれば、レーモン・ラディゲやヘルマン・ヘッセ、中島みゆきにいたるまで枚挙にいとまがない。そし

て現在、不登校現象が社会的に問題視されるようになって久しく、令和２年度、文部科学省によって不登校であると認められている小・中学生は 19 万人にのぼる[1]。筆者もまた、中学生および高校生の頃におおよそ１年間にわたりいわゆる不登校の状態にあった。再び登校するようになったあとも、元当事者としての経験に照らし合わせながら、メディアにおいて個々の不登校現象が普遍化されて論じられることに疑問を抱いてきた。その疑問に基づき、不登校問題のイメージが映像メディアによってどのように抽象化され固定観念化されているのか明らかにしたいと考えたことが研究の動機である。

関連する先行研究および研究の有意性

本稿では映画学的なドキュメンタリー分析の手法に倣いながら、実際に映像作品の分析を行っていく。現在のところ、不登校問題を主題としているドキュメンタリーを分析対象とした研究は存在しない。したがってこの研究は「不登校に関するドキュメンタリー」という真新しい分析対象を採用することになるが、研究に際しては大きく二つの分野の先行研究を参考にする。一方は心理学や社会学、教育学における不登校研究であり、もう一方は映画学やテレビ研究におけるドキュメンタリー研究である。不登校に関する先行研究からは、不登校現象を指す呼称（およびその呼称に付随する概念規定）、不登校現象の原因論、不登校対策の三点を読み解いていく。他方ドキュメンタリーに関連する先行研究からは、過去に提示されてきたドキュメンタリーの分類や理論をまとめ、それを分析の基盤とする。重ねて確認するならば、本研究の独自性は、二種の先行研究を用いつつ不登校問題を主題としたドキュメンタリーという全く新しい映像分析の対象を採用している点にある。さらに、映像作品における不登校問題の表象がどのようなものであるか明らかにすることは、言い換えれば、不登校問題の社会的な受容の一例を提示することであり、したがって本研究は不登校研究の観点においても有意義であると窺える。

1　文部科学省『令和２年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要』（https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf 2023 年１月１日最終閲覧）

既に述べたように、本稿で分析するドキュメンタリーは、2019年5月30日にNHKで放送された『NHKスペシャル シリーズ子どもの“声なき声”第2回「“不登校”44万人の衝撃」』である。当作品の特筆すべき部分は、少なくとも表面上は様々な関係者の視点から不登校問題に向き合おうとしている点である。例えば作品中では、複数の中学校での密着取材に基づき生徒や教師、教育委員会の考えや取り組みを伝えたり、教育学の専門家や不登校経験のあるタレントを交えた議論を提示したりすることによって、不登校問題を多角的に捉えようとする試みが見られる。しかしながら作品の演出に着目した分析を行うと、実際のところその多角的な構成は均衡の取れたものではなく、制作者は自らの訴えたい結論へ向けて視聴者を誘導しようとしているということが分かる。要するに『“不登校”44万人の衝撃』は、製作者の意図が反映された演出が巧みに施されている作品であり、映像作品における不登校問題の描かれ方の一例を明らかにするのにお誂え向きであるということである。

研究の構成

本稿は以下のような構成をとる。

まず、第1章では不登校に関する先行研究をもとに、不登校現象の呼称およびその概念規定、不登校現象の原因論、そして不登校対策という三つの側面から不登校の歴史と現状を把握する。また、ここで論じた観点と内容は、第3章における映像分析の指針となる。

次に、第2章ではドキュメンタリーに関連する先行研究をまとめる。ここでは、ドキュメンタリー映画研究の第一人者であるビル・ニコルズの理論および分類と、映画学について体系的に解説した『フィルム・アート―映画芸術入門』（David Bordwell and Kristin Thompson[藤木秀朗監訳]、名古屋大学出版会、2009）内のドキュメンタリー論を参照する。それに加えて、日本のテレビ・ドキュメンタリーの歴史を振り返り、主要なドキュメンタリー制作者の手法と理念をまとめる。以上の二つの章を通して、研究に必要な知識および方法を取り入れ、作品分析の基盤を固める。

第3章では不登校を題材にした映像作品の分析を行う。第1節では、不登

校問題を題材にした作品が多く作られたテレビドラマに注目して、過去の映像作品における不登校表象を考察する。第2節からテレビ・ドキュメンタリー『“不登校”44万人の衝撃』の演出に着目した本格的な分析を始め、特に第3節から第6節にかけては、第1章で論じた三つの観点に即して、不登校生徒の属性の固定観念化、不登校の要因としての学校状況の強調、そして最新の不登校対策の肯定的かつ一面的な描写が施されていることを明らかにする。最後に第7節では、『“不登校”44万人の衝撃』を構成するドキュメンタリー映像以外の部分に注目し、当作品の総合的な演出戦略の解明を図る。

第1章　不登校の歴史

本章の目的は、日本における不登校現象の実状を把握することである。本章で獲得する情報は、第3章で『“不登校”44万人の衝撃』を分析するにあたって必要な前提知識となる。本章では、心理学、社会学および教育学の分野の先行研究をもとに三つの観点から不登校の歴史を振り返り、日本で不登校現象がどのように認識されてきたか明らかにする。三つの観点とは、不登校現象の呼称と概念規定（第1節）、不登校現象の原因論（第2節）、そして不登校対策（第3節）である。第3章の分析はこの三つの観点に即して行われる。

第1節　不登校現象の呼称と概念規定

現在、不登校現象は一般的に「不登校」と呼ばれている。しかし、「不登校」は、不登校現象の発見以来一貫して使用されてきた呼称であるという訳ではない。日本の学術研究における不登校現象の呼称は、おおよそ以下の順に推移してきた。

(1)「学校恐怖症」―1960年代
(2)「登校拒否」―1960年代から1990年代まで
(3)「不登校」―1980年代から現在まで

またこれらの呼称は一概に不登校現象を指すといえども、各々の呼称が想

定している不登校現象は一律でないということを把握しておく必要がある。不登校現象の発見ののち、最も早い時期に用いられた「学校恐怖症」という呼称は、基本的に神経症的な症状を伴う不登校現象を指していた。次に登場した「登校拒否」という呼称の使用に際しては、神経症的なものを限定的に指す場合と、より包括的に不登校状態（単に登校していない状態）を指す場合があった。最後に、「不登校」という呼称が使用されるようになると、神経症的なものに限らず、読んで字のごとく単に登校していない状態を示すことが一般的になった。このような不登校現象の呼称と、その適用範囲の変遷の根底には、不登校生徒数の増加[2]や多様化があると考えられる。以下本節では、不登校現象の呼称の推移を具体的に解説する。

表１：文部科学省集計の不登校生徒数（中学生）の推移[3]

2　表１参照。

3　文部科学省「生徒指導資料第１集（改訂版）生徒指導上の諸問題の推移と これからの生徒指導 －データに見る生徒指導の課題と展望 --」（https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/1syu-kaitei/1syu-kaitei090330/1syu-kaitei.zembun.pdf 2023 年１月１日最終閲覧）および「令和２年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要」（https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf 2023 年１月１日最終閲覧）をもとに筆者が作成したものである。

（1）学校恐怖症

不登校問題に関する呼称の中で最も古いものは「怠学（ずる休み）」（英：*truancy*）である。日本における不登校研究の第一人者である佐藤修策によれば、1932年に、英国の研究者イスラ・T・ブロードウィン（Isra T. Broadwin）の怠学の研究の中で、神経症的な不登校現象の存在が指摘された[4]（佐藤 1996）。1941年に、米国のアデレード・M・ジョンソン（Adelaide M. Johnson）らはこの神経症的症状を持つ不登校現象に着目し、従来の「怠学」と区別するために「学校恐怖症」（英：*school phobia*）と名付けた（Johnson, Falstein, Szurek and Svendsen 1941 2018）。佐藤は研究者としての自らの経験に沿って、日本の不登校現象に関する研究は米国の研究の影響下に始まったため、「学校恐怖症」という呼称も同様に輸入され、日本の研究の黎明期である1950年代後半から1960年代前半にかけて頻繁に使われた、と振り返っている。また、「学校恐怖症」という言葉が使われる際、不登校現象を生み出しているのは学校を対象にした恐怖ではなく、母親との心理的な分離に対する不安にあると考えられていたことに注意しなければならないと述べている[5]。

（2）登校拒否

同じく佐藤によれば、1960年代の後半を迎えるにつれて、不登校問題を抱える子供の高齢化や増加のために、母親との分離不安に原因があるとする説に限界が訪れた（佐藤 1996）。この分離不安説を中心に据える「学校恐怖症」という呼称で不登校現象を正確に表すことは次第に難しくなっていき、1970年頃から「学校恐怖症」に代わって「登校拒否」という呼称が広く用いられるようになった。「登校拒否」という用語が適用される範囲について、佐藤は「学校に行っていない状態のすべてを包括するものではなく」、「神経症的なものに限られて」いたと理解している（佐藤 1996, 314）。一方で、佐藤と同時期の研究者である小泉英二は「登校拒否とは、単に症状を指しているに

4　ブロードウィンは神経症的な不登校現象を怠学の一種としていた。
5　第1章第2節に詳しい。

過ぎない」と考え、原因や心理機制の違いに着目して「登校拒否」を分類した（小泉 1973, 16）。彼の分類には、広義の登校拒否と狭義の登校拒否があり、前者には狭義の登校拒否である「神経症的登校拒否」に加えて「怠学傾向」や「精神障害によるもの」、「積極的・意図的登校拒否」などが含まれている。また、従来「学校恐怖症」と呼ばれていた分離不安型の不登校現象は「神経症的登校拒否」の中に含まれるとされている。要するに小泉は、「神経症的登校拒否」に一定の特殊性を認めつつも、佐藤とは対照的に「学校に行っていない状態のすべて」を「登校拒否」と呼ぶことに問題はないと判断していたということである。このように先行研究における「登校拒否」の適用範囲の規定を整理すると、「登校拒否」という用語が指す範囲は、使用者やその時々のニュアンスによって変化していたと言える。

（3）不登校

1980 年代に不登校現象の原因論の中核が、子供や家庭から学校や社会に拡大していくにつれて「不登校」という呼称も使われるようになった。不登校現象の社会要因説を提唱した森田洋司は、「拒否」という用語が不登校問題を抱える子供の実状にふさわしくないという理由で「不登校」という用語を使用した（森田 1991）。その実状とは、登校しなければならないと思っているにもかかわらず登校できない子供や、学校に拒絶反応を示すわけでもないが意義を認めることもないために登校しない子供が少なからずいたことである。森田は、「不登校」の定義を「単に登校することが不能となる『状態』」のことであるとし（森田 1991, 2）、「神経症的傾向」が不登校現象の中核にあるとする従来の立場を踏襲せず、「学校嫌い」と呼ばれる回避感情を不登校現象の中核に位置付けた。実際に、現在「不登校」と呼称される場合には、対象の子供が神経症的であるかどうかに限らず、単に登校できない（あるいは登校しない）状態のことを指すことが多いと窺える。しかしながら、その呼称に対して佐藤は、「一つの用語のなかにいろいろな欠席状態が含まれることになると、問題の理解や支援の方法が混乱し、たしかな支援の指針や方向が示されなくなる恐れが多分に生まれることとなる」と懸念を呈している（佐藤 1996, 316）。確かに「不登校」という用語は、適用範囲の広さを武器

に圧倒的な市民権を得ている。一方で、その代償として、人々が「不登校」という用語に触れる際に形成する不登校現象のイメージの具体性を失ってしまった可能性も否めない。

現在、文部科学省は不登校現象を表す言葉として「不登校」を使用している。不登校の児童生徒は「年度間に連続又は断続して 30 日以上欠席した児童生徒」のうち「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者」であるとされ、そのうち「『病気』や『経済的理由』による者を除く」とされている[6]。

同様に『“不登校”44 万人の衝撃』においても「不登校」という用語が使用されている。しかしながら、番組内の不登校生徒は、被害者や弱者としての側面を強調するために繊細かつ神経質であるという特殊なイメージに当てはめられて描かれている。このように前時代的な印象に取り憑かれた描写が、一般的に「不登校」という呼称が想定している多様な子供たちを適切に表しているとは言えない。当作品内で「不登校」と呼ばれる生徒の性質がどのような演出によって規定されているかについては、第 3 章第 3 節で詳しく論じる。

第 2 節　不登校現象の原因論の変遷

不登校現象の研究は、新しい形の―当時は神経症的と考えられた―登校拒否行動に「学校恐怖症」という呼称を与え、非行に関連する登校拒否行動などと区別するところから始動した。しかし第 1 節で述べたように、時代によって不登校現象を意味する用語や、その指し示す範囲は変化してきた。そしてその背景には、不登校生徒数の増加に伴う不登校問題の原因論の推移があった。したがって本節では、心理学と社会学の先行研究を用いて不登校現象の原因論を整理する。原因論は以下のように分けられる。

6　文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 - 用 語 の 解 説 」（https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/shidou/yougo/1267642.htm 2023 年 1 月 1 日最終閲覧）

(1) 分離不安説―1960 年代（「学校恐怖症」の使用時期）
(2) 家庭要因説―1960 年代から（「登校拒否」の使用時期以降）
(3) 学校要因説―1980 年代から（「登校拒否」から「不登校」への移行時期以降）
(4) 社会要因説―1990 年代から（「不登校」の使用時期）

(1) 分離不安説

佐藤修策によれば､米国の研究から流用された｢学校恐怖症｣という言葉は、学校を対象とした恐怖を文字通り意味するわけではなかった（佐藤 1996)。この用語が使われた 1960 年前後の日本の研究では、不登校現象の問題の本質は母親との分離不安にあるという説が主流であった。すなわち、母親から心理的離乳を果たそうとする過程において覚えた不安が、学校状況に置き換えられることによって不登校現象が生じるということである。このように初期の「学校恐怖症」という呼称が使われた研究では、母子関係に不登校現象の原因を認める分離不安説が採用されていた。

(2) 家庭要因説

不登校現象の研究の第一人者である佐藤は、1959 年、児童相談所での臨床経験をもとに発見した不登校現象に「神経症的登校拒否」という名称を与えた。その理由として、「分離不安や学校恐怖に心理的、環境的、治療的に分類できないものも多いことを知ったから」と述べている（佐藤 1996, 25)。佐藤は神経質的傾向に代表される子供の性格や、過保護な親と依存的な子供の間に結ばれる親子関係が原因であると推測した。

他方、精神科医の高木隆郎は自らを分離不安説に異を唱えた最初の研究者であると考えている（高木 1983)。1963 年の時点で、不登校生徒は「むしろ高学年児に多い」､「学区内近隣への外出は拒むが遠方の親戚などへはひとりで出かける」､「母につれそってもらっても登校できない」といった根拠を提示して分離不安説の反証を試みた（高木 1983, 37-8)。そして分離不安の

代わりに、子供の完全癖的、神経質的パーソナリティ[7]や、家族の性格特性[8]などを不登校現象の原因として挙げた。

(3) 学校要因説

佐藤によれば、1980 年代以降、登校拒否行動を示す子供の更なる増加に伴い、子供の性格特性や家族の関係性に問題があるとする論調を見直す必要が生まれた（佐藤 1996)。その結果、学校状況や社会状況に不登校現象の原因を見出だす説が広まった。児童精神科医の渡辺位は、画一的で抑圧的な学校状況を痛烈に批判し、「成長・発達が阻害され自己喪失の危機を感じる学校状況に対し、無意識に自己防衛的な回避反応をとり、不登校状態に陥るのである」と述べた（渡辺 1982, 20)。渡辺の学校病理的な要因論に便乗した元小学校教師の奥地圭子[9]は、子や親が悪いという考え方（家庭要因説）に一石を投じ、不登校を「治す」という発想を問い直す必要があると訴えた（奥地 2005)。このような言説の広まりを受けて、文部省は 1992 年付けの報告で、不登校現象は特定の子供に特有の問題があることによって起こるものではなく、どの児童生徒にも起こりうるものであるという認識を明言した[10]。

(4) 社会要因説

社会学者である森田洋司は、登校回避感情が生まれる仕組みを現代社会の構造の中に見出そうとした（森田 1991)。この 1991 年に発表された森田の原因論が社会要因説の中核である。森田は、米国で犯罪原因論として展開されたトラビス・ハーシ（Travis Hirschi）のボンド理論（英：*social bond*

7　このようなパーソナリティを持つ子供は些細な失敗に不安を感じるため、学校状況が強い緊張の場となっている。

8　男親の役割を果たす父親像が弱いと、子供は社会化のモデルを失い、幻想の中に完全な理想我を作り上げてしまう。神経症的で過保護な母親像が強いと、母子関係の結びつきが強くなり、子供は社会的同一性の獲得に失敗してしまう。このような家族の性格特性が子供の不登校現象に影響していると高木は考えた。

9　奥地は自身の子の不登校を機に学校状況を問題視し始めた。

10　文部科学省「今後の不登校への対応の在り方について（平成 15 年 3 月)」(https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1283839/www.mext.go.jp/b_menu/public/2003/03041134.htm 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)

theory）[11] を応用して、ボンド（社会的な結びつき）の四つの要素について検討することで不登校現象を解析した。森田が注目したボンドは以下の四つである。

［1］友人関係や対教師関係への結びつき
［2］将来の目標を見据えた自己実現を図る場としての学校への結びつき
［3］刹那主義的な自己実現の場としての学校への結びつき
［4］学校社会規範への結びつき

森田は全国の都市域に住む中学２年生を対象としたアンケートに基づく実態調査を行い、以上の四つのボンドが弱まっていると分析した。さらに彼は、これらのボンドが弱まったのは現代社会の私事化[12]に伴って、学校が自分にとって持つ意味について子供たちが考えるようになったからであると考察した。また、豊かな社会で育ったことで、将来よりも現在の欲求充足に価値を置く傾向が強くなっていることも指摘した。このように社会要因説の提唱者である森田は、不登校現象が多くの子供に見られるようになったのは、現代社会の私事化によって、子供たちを学校に結びつけていた種々のボンドが弱まってきているからであると主張した。

先行研究を整理したことで、不登校現象の原因論の中核は子供や家庭から学校、社会へと推移してきたということが分かった。『“不登校”44 万人の衝撃』では、2018 年の公益財団法人の調査によって、従来の文部科学省の調査では集計されることのなかった不登校傾向にある中学生の実態が明らかになった[13]ことをきっかけに、多くの子供を不登校傾向に陥らせている要

11　人はボンド（英：*social bond*）によって制度や他者と結びついているとし、その結びつきに着目することで何故人々は規範に従うのかということを説明しようとする理論のこと。

12　公的な世界に対して距離を置き、私的な領域を確保したがる現代社会の動向のこと。

13　日本財団「不登校傾向にある子どもの実態調査」（https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/information/2018/20181212-6917.html 2023 年 1 月 1 日最終閲覧）

因が追究されている。本稿では第3章の分析を通じて、制作者が不登校の真の原因として問題視しているのは、生徒を苦しめている学校状況であるということを明らかにする。特に第3章第4節では、制作者がどのような戦略を用いて、視聴者に自身の支持する原因論を受け入れさせようとしているのか論じる。

第3節　不登校の対策―校内フリースクールとイエナプランを中心に

不登校現象の原因論が多岐にわたっていることからも察せるように、不登校対策は一様ではない。精神科医の稲村博は多様な立場からの不登校対策や不登校支援を体系的にまとめた（稲村 1994）。稲村は、学校、教育委員会、相談機関、医療機関、情短施設[14]、総合的相談治療機関などにおける対応に加えて、適応学級[15]、フリースクールを個々の事例として挙げた。往年、不登校現象の原因が主に子供や家庭の性質にあると考えられていた時期には、不登校（登校拒否）は治療するものであるという考え方が強かった。しかし、学校や社会に原因があるという説の流布に伴い、不登校の子供の在り方をそのまま受け入れて対応するフリースクールなどの場が増加した。

『“不登校”44万人の衝撃』では、不登校支援に関して(1)「校内フリースクール」という取り組みと、(2)「イエナプラン」（独：*Jenaplan*）というオルタナティブ教育の中の一つの教育理念が登場する。したがって本節では、この二つの用語の概念をまとめ、日本における不登校問題との関連について明らかにする。

(1) 校内フリースクール

初めに、フリースクール（英：*free school*）の概念を捉えておく。「フリースクール」という用語の定義は多岐にわたるが、『新教育学大事典』によると、フリースクールは、サマーヒル学園（サマーヒル・スクール、英：*Summerhill School*）の系統をひくものと、その他の系統のものに分類され

14　情緒障害児短期治療施設の略称。現在は児童心理治療施設と呼ばれる。
15　不登校児のために特別に作られた学級のこと。

る（細谷、奥田、河野、今野編 1992）。教育学者の永田佳之は、一般的に前者の意味で用いられることが多いと論じ、フリースクールの代名詞的な存在としてそのサマーヒル・スクールを挙げた（永田 1996）。サマーヒル・スクールとは 1920 年代にドイツに設立されたのち、南イングランドの「サマーヒル」（英：*Summerhill*）と呼ばれていた地へ移転した、世界最古のフリースクールである。創始者のアレクサンダー・サザーランド・ニイル（Alexander Sutherland Neill）は、ヒューマニストとして、子供たちの自由を尊重することに重きを置いた教育を目指した。永田の考察によれば、ニイルがフリースクールを開始した時に「フリー（自由）」という言葉が意味していたのは、ニイルの抱いていた権力への反抗に起因する「恐怖からの自由」であった。サマーヒル・スクールにおける代表的な教育様式としては、平等主義に基づき性別や年齢による差の撤廃が徹底される[16]ことや、子供による民主主義的な自治が行われることが挙げられる。

次に、日本におけるフリースクールの歴史と特性を確認する。前出の奥地圭子によれば、日本におけるフリースクールは、不登校（登校拒否）生徒数の急増を背景に広まったという点で特徴的である（東京シューレ編 2000）。奥地は、日本でフリースクールに対する関心が増加したのは、不登校現象の要因としていじめや体罰、受験戦争などの学校における教育状況が問題視された結果であると述べている。実際に、日本におけるフリースクールの草分けであり、代表的存在である「東京シューレ」は、1985 年に「登校拒否の親の会」の活動から生み出された。その創始者である奥地[17]は、東京シューレにおける基本的な教育の理念を五つ挙げている。それらは、［1］居場所であること、［2］やりたいことを大切にする、［3］自由を尊重する、［4］子どもたちによる自治、［5］個の尊重、である（東京シューレ編 2000, 80-90）。これらの理念からは、日本におけるフリースクールがサマーヒル・スクール

16　生徒―生徒間のみならず生徒―教師間の差別も撤廃が目指される。

17　創設以来、長年代表を務めていたが、東京シューレのスタッフによる子供への性暴力加害事件に関する自身の不始末のため 2021 年に失脚した。読売新聞「「東京シューレ」創設者、理事長を退任…スタッフの性暴力事件で責任問われる」（https://www.yomiuri.co.jp/national/20210624-OYT1T50249/ 2023 年 1 月 1 日最終閲覧）より

の教育理念を受け継ぎつつ、既存の学校に通えない児童、生徒の居場所となることを特に意識していることが分かる。

フリースクールに関する知識を得たところで、次に「校内フリースクール」とは何かということを解説する。校内フリースクールとは、不登校生徒を中心に、通常学級での授業参加に難色を示す子供たちを学校内で受け入れて自由な学びを目指す場のことである。この取り組みの先駆けは、2016 年に神奈川県横浜市の中学校に、不登校児の支援を主たる目的として設立された「特別支援教室」である [18]。つまり、校内フリースクールは非常に新しい概念である。校内フリースクールでは、登校時刻に柔軟性を持たせることや、生徒各々の志向に合わせたカリキュラムを組み立てることで、個々の生徒に応じた学習環境作りが行われる。現在のところ、不登校生徒の減少につながっているという報告もある一方で、校内フリースクールの普及を図る際に優秀な教諭をいかに確保していくのかなどという課題もある。いずれにせよ、校内フリースクールは誕生して間もない取り組みであるために、批判的な検証が十分になされているとは言えない。

当時、神奈川県横浜市の中学校の校長として特別支援教室（校内フリースクール）の制度を整えた平川理恵は、その後広島県教育委員会教育長となり、『“不登校”44 万人の衝撃』の取材を受けている。このように『“不登校”44 万人の衝撃』では、数ある不登校対策の中で校内フリースクールという取り組みが注目され、それを足掛かりとした問題解決が模索されている。本稿で校内フリースクールの一長一短を詳しく検討することはないが、第 3 章第 5 節では、番組制作者が校内フリースクールという新しい取り組みを多角的に検証しつつ提示しているか否かという点に注目し、校内フリースクールの描写に込められた制作者の意図を読み取いていく。

(2) イエナプラン

『“不登校”44 万人の衝撃』で注目されている「イエナプラン」とは、オ

18　産経新聞（那須慎一）「横浜の市立中、不登校児を学校で受け入れる「特別支援教室」で効果」（https://www.sankei.com/article/20170117-NGCY5RJOQJINHP5SHUO2FPBFIY/ 2023 年 1 月 1 日最終閲覧）

ランダで普及しているオルタナティブ教育（英：*alternative education*）の一種である。前出の永田佳之によれば、オランダは憲法第二三条の「教育の自由」のもとに、「学校創設の自由」、「学校方針の自由」、「学校組織の自由」が保障されている、世界で最も（政府から）自由で自立した教育が行われている国の一つである（永田 2005）。

『“不登校”44 万人の衝撃』に取材協力者として名を連ねているリヒテルズ直子は、オランダのオルタナティブ教育を詳しく解説し、日本に紹介した。（リヒテルズ 2004）。オルタナティブ教育とは、文字通り既存の教育に取って代わる別の教育という意味である。ここでいう既存の教育とは、同年齢の子供たちをひとつの教室に集めて、教壇に立った教師によって一方的に伝達される知識を子供が受動的に習うという形式の教育のことである。オルタナティブ教育は、特に広く浸透しているオランダでは「刷新教育」（蘭：*vernieuwing onderwijs*）と呼ばれる。それは、教育は時代と共に常に新しく改められていくものであると考えられているためである。リヒテルズは、オランダにおける主なオルタナティブ教育には、[1] モンテッソーリ教育、[2] ダルトン教育（ドルトン・プラン）、[3] イエナプラン教育、[4] シュタイナー教育、[5] フレイネ教育の 5 種類が存在すると説明している。これらのオルタナティブ教育のうち、以下では、『“不登校”44 万人の衝撃』において新しい教育の形として注目されているイエナプラン教育について紹介する。

ドイツの教育学者ペーター・ペーターゼン（Peter Petersen）が創始したイエナプラン教育は、1955 年にオランダに紹介されると、現在に至るまで小学校を中心に広く普及してきた。イエナプランでは、学校が実際の社会を反映したものであるべきであるという教育理念に基づき、親の学校教育への参加や、軽度の障害を持つ子供たちの受け入れが積極的に奨励される。教員が子供たちと一緒に輪になって話し合ったり、異年齢の子供たちが同じ教室で学んだりすることで社会における協働性を育むことが目標とされている。イエナプランにおける学校生活は、対話、遊び、仕事（学習）、催し（行事）といった四つの集団的な基本活動によって構成されている。

1927 年にはすでに日本に紹介されていたイエナプランであったが、2000 年代にリヒテルズ直子によって再び紹介されたことを機に広く知られるよう

になった[19]。2019年には日本初のイエナプラン・スクールが開校し、2022年には、広島県福山市立常石ともに学園がイエナプランを取り入れた初めての公立小学校として開校された[20]。このように、学校教育法によって定められた学校（通称：一条校）[21]以外での義務教育が認められていない日本においては、従来の一条校の教育様式に苦悩する子供たちの不登校対策として、多様な義務教育の場を提供するために、オルタナティブ教育のひとつであるイエナプランを取り入れた一条校を設立する試みが実施されていると見受けられる。

ところで、教育学者の熊井将太はイエナプランのような異年齢学級教育を展開していく上での課題について検討した（熊井 2015）。熊井は異年齢学級に関して、援助者としての過大な負担が年長者にのしかかってしまう可能性や、逆に年長者が悪い模範となってしまう可能性があることを論じた。「学年制学級における教育成果と異年齢学級における教育成果を体系的に比較した研究成果はいまだ存在していない」ことを指摘して、異年齢学級教育を展開していくにあたって、その教育を有効に機能させることができる授業内容や発達段階とはいかなるものか慎重に検討していく必要があると述べた（熊井 2015, 64-5）。

以上、既存の管理型教育に苦しむ子供たちに多様な教育を提供するため、代替教育の一つであるイエナプラン教育が、不登校対策を含む、新たな教育の形として期待されていることを示した。しかし一方で、イエナプランの様な異年齢学級教育を早急に推し進めることは、希望的可能性と同時に危険性もはらんでいるということが分かった。第3章第6節では、イエナプランの導入についての実状を踏まえたうえで、『“不登校”44万人の衝撃』の中で

19　日本イエナプラン協会「イエナプランの始まりと発展」（https://japanjenaplan.org/jenaplan/roots/ 2023年1月1日最終閲覧）

20　常石ともに学園「学校要覧」http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/shoutsuneishi/img/TomoniPanf.pdf 2023年1月1日最終閲覧）

21　文部科学省「学校教育法（昭和二十二年三月二十九日法律第二十六号）」（https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317990.htm 2023年1月1日最終閲覧）

イエナプランのどのような側面が強調されたり、隠されたりしているのか分析し、制作者がどのような意図をもって不登校対策を描写しようとしているのか明らかにする。

第1章全体を通しては、不登校現象の呼称と規定（第1節）、不登校現象の原因論（第2節）、そして不登校対策（第3節）という三つの観点から不登校現象の実状を考察してきた。第1節では、不登校現象を指す呼称が「学校恐怖症」、「登校拒否」、「不登校」の順に変化してきたことと、その変遷に伴い、それぞれの呼称が定める不登校現象の範囲が広まってきたことが明らかになった。第2節では、不登校現象の原因論が「分離不安説」、「家庭要因説」、「学校要因説」、「社会要因説」に分類されることが分かった。第3節では、校内フリースクールという取り組みとイエナプランという教育理念について解説し、近年これらが不登校対策として注目されているという旨を述べた。第3章では、第1章で獲得したこれらの知識を踏まえて、同様に三つの観点から『“不登校”44万人の衝撃』の分析を行う。

ただし、一つの映像作品である『“不登校”44万人の衝撃』の分析を行うにあたって、不登校現象に関する知識のみを共有しているだけでは不十分である。したがって次章では、不登校現象に関する議論から一度離れ、ドキュメンタリーに関する先行研究を読み解いていく。第2章でドキュメンタリーを巡る歴史的な議論を振り返っておくことで、第3章における『“不登校”44万人の衝撃』の属性の解明と、適切な手法による分析が可能となる。

第2章　ドキュメンタリーを巡る議論

『“不登校”44万人の衝撃』を分析する前に、ドキュメンタリーの歴史的文脈の中で本作品の位置付けを把握しておく必要がある。それは『“不登校”44万人の衝撃』の属性を明らかにすることによって、その性質に適した分析を行うためである。したがって本章では、映画学およびテレビ研究におけるテレビ・ドキュメンタリーの議論を振り返る。

具体的な議論をみる前に、『広辞苑　第七版』（新村出編 岩波書店、

2018)、『世界映画大事典』（岩本憲児、高村倉太郎監修 日本図書センター、2008)、『現代映画用語事典』（山下慧、井上健一、松﨑健夫 キネマ旬報社、2012）を参照して、「ドキュメンタリー」という言葉の定義を確認しておく。『広辞苑』において、ドキュメンタリーは「虚構を用いずに、実際の記録に基づいて作ったもの。記録文学・記録映画の類。実録。」と定義されている（新村編 2018, 2082)。他方『世界映画大事典』および『現代映画用語事典』では、次の通り、より映画学に即した専門的な語法の解説がなされている。『世界映画大事典』によれば、「ドキュメンタリー」という用語は紀行映画を意味していた仏語の *documentaire* に由来し、英国の映画監督ジョン・グリアスン（John Grierson 1898-1972）が初めて英語として使用した。加えてグリアスンは、ドキュメンタリーとは「現実の創造的処理（英：*the creative treatment of actuality*)」であるとする著名な定義も残している。『世界映画大事典』では、昨今のドキュメンタリーの語法に関して、そのグリアスンの定義への言及に加えて「作家性や芸術性の強い、劇的に構成されている非劇映画を指すのに用いられること」が多いと述べられている（岩本憲児、高村倉太郎監修 2008, 277)。その一方で、非虚構的なニューズ映画や教育映画などは、「ドキュメンタリー」という項目の中には含まれず、ドキュメンタリー（映画）と共に「記録映画」という項目の中に収容されている。また、『現代映画用語事典』では、ドキュメンタリーが狭義のものと広義のものに分けられている。狭義のドキュメンタリーは、『世界映画大事典』で言うところの「ドキュメンタリー」に当てはまり、広義のドキュメンタリーは同じく『世界映画大事典』で言うところの「記録映画」に当てはまる。上記のような単語の多義性を鑑みるに、テレビ・ドキュメンタリー分析において「ドキュメンタリー」という用語を取り扱う際は、その一般的な語法を踏まえながら、映画学における専門的な定義を柔軟に参照するのが適当であると推察される。

上記の『世界映画大事典』からの引用にも見受けられるように、ドキュメンタリーは一般的に劇映画と対をなす概念であると考えられている。しかしボードウェルとトンプソンによれば、実際のところ、ドキュメンタリーと劇映画の間に明確な境界線を引くことはできない（Bordwell and Thompson 2009)。例えば、歴史映画や伝記映画では史実を描いていたとしても劇映画

と認識されることが一般的であるし、逆に物語性の強いドキュメンタリーも存在する。ドキュメンタリーとは、現実世界をありのままに映し出したものと言うよりは、製作者が事実であるとレッテル貼りした映像を届け、それを視聴者が信頼する過程をもって定義されるものであると言う。

ドキュメンタリーに関する基礎的な前提知識を得たところで、これからドキュメンタリーを巡る具体的な先行研究の考察に入っていく。第1節では、ドキュメンタリー研究の重鎮であるビル・ニコルズ（Bill Nichols）によるドキュメンタリーの分類をまとめる。第2節では、『フィルム・アート』(Bordwell and Thompson、名古屋大学出版会 2009）におけるドキュメンタリー理論を解説する。最後に第3節では、日本のドキュメンタリーの歴史を振り返り、主要なテレビ・ドキュメンタリー制作者の理念を考察する。

第1節　ビル・ニコルズによるドキュメンタリーの分類

ビル・ニコルズによれば、ドキュメンタリー映画を含む全ての映像作品は素材の選択と編集を伴っているため、ドキュメンタリーが客観的であるかどうかという点ではなく、ドキュメンタリー製作者がどのように出来事を型取っているかという点がドキュメンタリー研究において問題となる。ニコルズは、製作者が用いた技法とその特性に伴う出来事の抽出方法の違いに注目してドキュメンタリーを六つに分類した（Branigan and Buckland 2013)。ニコルズによって識別された六つのタイプは次のように分類される。

(1) 解説型ドキュメンタリー（英：*expository documentary mode*）
(2) 観察型ドキュメンタリー（英：*observational documentary mode*）
(3) 参加型ドキュメンタリー（英：*participatory documentary mode*）
(4) 反映型ドキュメンタリー（英：*reflexive documentary mode*）
(5) パフォーマンス型ドキュメンタリー（英：*performative documentary mode*）
(6) 詩的ドキュメンタリー（英：*poetic documentary mode*）

以下、これらのタイプについて簡潔にまとめて解説する。

(1) 解説型ドキュメンタリー

解説型ドキュメンタリーは、情報伝達を行う映像に、ヴォイス・オーヴァーによってもたらされる、映像に関する注釈や映像だけでは伝えられない情報が組み合わされて作られる。解説型ドキュメンタリーの目的は情報伝達ないし議論の提供であり、製作者の主張は問題解決の形を通して表される。このタイプのドキュメンタリーはしばしば、記述的に情報を提供するという目的を超えてしまうことがあり、作品を通して製作者から視聴者への作用が大きく働いていることがその特徴である。要するに、解説型ドキュメンタリーは単に情報を伝えたり議論を提供したりするだけでなく、製作者の意を汲む何らかの印象を視聴者に与える可能性を擁するものであると言える。

(2) 観察型ドキュメンタリー

対照的に、観察型ドキュメンタリーの製作者は出来事を可能な限りそのまま伝えることを目標とする。出来事の恣意的な切り取りを避けるために、長回しや同時録音といった技法が頻繁に用いられる。観察型ドキュメンタリーの理想は、製作者が不干渉であることによって、中立的で予測のできない展開が披露されることであるが、実際には、観察型ドキュメンタリーの中にも製作者の暗黙の目論みが働いている場合があると考えられている。

(3) 参加型ドキュメンタリー

参加型ドキュメンタリーでは、参加者兼観察者として作品に登場する製作者と、出来事の証人でありつつ撮影の対象となる人々の間の相互作用が提示される。製作者が仕掛けるインタビューを中心とした駆け引きによって、撮影される人々の特殊な反応が引き起こされて視聴者に届けられる。参加型ドキュメンタリーには、製作者が中立性や客観性を保とうとせず、作品内に積極的にかかわっていく傾向にあるという特徴がある。

(4) 反映型ドキュメンタリー

一方で、反映型ドキュメンタリーの製作者は客観性を装うことをやめるだ

けにとどまらず、視聴者に対して作品制作の過程までも提示しようとする。例えば、このタイプの著名な作品である『カメラを持った男』（露：*Человек с киноаппаратом* ソビエト連邦、1929 年）において、監督のジガ・ヴェルトフ（Дзига Вертов）は、撮影技法を強調した映像を用いることで、「映画眼（露：*кино-глаз*）」によって「映画真実（露：*кино-правда*）[22]」が映し出される過程―フィルムの特質によって人間の目の能力ではとらえられない（真実の）世界が顕される過程―を視聴者に示そうとした。

(5) パフォーマンス型ドキュメンタリー

反映型ドキュメンタリーからさらに一歩、演出の戦略を反映することに踏み込んだパフォーマンス型ドキュメンタリーでは、過度に表現的で喚情的な方法によって逆説的に主題が描き出される。世界に共通の認識があるという仮説に疑問を呈するため、あえて主観的に語り掛けることで各々の視聴者の感情を掘り起こそうとする狙いがある。

(6) 詩的ドキュメンタリー

詩的ドキュメンタリーのルーツは、無声映画時代のソビエト連邦の映画製作者による実験的な作品や、初期の解説型ドキュメンタリー作品群にさかのぼる。論争的であると同時に同じくらい詩的であるのがその特徴である。

以上のように、ニコルズの理論ではドキュメンタリーが六つのタイプに分類される。詳細は第 3 章で論じるが、本論文で分析する『“不登校”44 万人の衝撃』は、不登校生徒の学校生活に密着した取材を通して今後の学校の在り方を問いかけるものである。したがって当作品は、主張が問題解決の形を通して伝えられる「解説型ドキュメンタリー」形式の作品であるらしいということが推察される。

22　ヴェルトフは、カメラを通した眼（映画眼）は人間の眼よりさらに深い真実を捉えられると考えた。

第２節　『フィルム・アート』におけるドキュメンタリー論

本節では、世界的に映画学の教科書として使用されている『フィルム・アート』を参照して、デイヴィッド・ボードウェル（David Bordwell）とクリスティン・トンプソン（Kristin Thompson）のドキュメンタリー理論を考察する。まず、同書において列挙されているドキュメンタリーのジャンルをまとめ、続いてドキュメンタリー映画形式のタイプについて解説する。ドキュメンタリーのジャンルとは、完成された作品そのものが持つ表象的なタイプのことである。一方でドキュメンタリー映画形式のタイプとは、映画を組み立てる際の目的の違いによる区分のことである。

観客と作り手が慣例をもとに認識する映画作品のタイプをジャンルと呼ぶ。ドキュメンタリーにもジャンルがあり、『フィルム・アート』内では様々なドキュメンタリーのジャンルが列挙されている。以下の表２は同書に記載されているドキュメンタリーのジャンルをまとめたものである。

表２：ドキュメンタリーのジャンル [23]

ドキュメンタリーのジャンル	構成
編纂映画（英：*compilation film*）	アーカイブ映像の組み合わせ
インタビュー形式	インタビュー映像
話し顔（英：*talking heads*）形式	ミディアム・クロースアップで撮影される人々の証言の記録
ダイレクトシネマ（英：*direct cinema*）	ロング・テイクや同時録音によって出来事をあるがままにとらえようとした記録
自然ドキュメンタリー	拡大レンズなどによる自然の映像
ポートレイト・ドキュメンタリー	ある魅力的な人物の生活をめぐるシーンを中心とした映像

23 『フィルム・アート』（David Bordwell and Kristin Thompson 藤木秀朗監訳 2009）をもとに筆者が作成した。

ひとつのドキュメンタリー作品の中に、これらのジャンルが複合的に構成されることは非常に多い。そのような、総合的なドキュメンタリーはテレビ・ドキュメンタリーにも頻出する。

映画学における用語の「形式」とは、「映画作品の構成要素の相互関係からなるシステム全般」のことである（Bordwell and Thompson 2009, 502）。ドキュメンタリーのジャンルや映像、音声が構成されていくことで、ドキュメンタリー作品の形式が確立されていく。したがってドキュメンタリーの形式は、製作者がどのような構成を用いて視聴者にメッセージを伝えようとしているかという点によって大別される。ボードウェルとトンプソンは、ドキュメンタリー映画形式を、カテゴリー形式とレトリック形式の二つに分類した。

カテゴリー形式とは、非物語的なタイプのドキュメンタリー形式のことである。ボードウェルとトンプソンは「カテゴリー」を「個人や社会が世界についての知識を構成するために生み出すグループ分けのこと」であるとしている（Bordwell and Thompson 2009, 129）。カテゴリー形式が用いられる場合には、そのグループ分けを基盤とすることによって簡潔に情報を伝えることが意図されている。

一方でレトリック形式とは、ある主題について説得力のある論証を施そうとするタイプのことである。レトリック形式のドキュメンタリーで扱われる主題は見解の問題であることが多く、事実に基づく証拠を用いるだけではなく感情に訴えかけることで視聴者を説得しようとする傾向にある。ボードウェルとトンプソンは、レトリック形式の作品で用いられる論証のタイプを(1)「情報源による論証」、(2)「観客中心の論証」、(3)「主題中心の論証」に分けて解説している。

(1) 情報源による論証

レトリック形式の作品は、作り手や語り手が主題に関する知識を所持していて信用に値する人間であると視聴者に印象付けようとする。作品は信頼できる情報源より届けられているのであると視聴者に思わせることによって、製作者の見解が受け入れられやすくなるような土壌が作られる。これが「情

報源による論証」である。

(2) 観客中心の論証

愛国心や感傷に訴えかけるような演出が頻出するのもレトリック形式の特徴である。このような、視聴者を感情的に揺り動かそうとする訴えかけを通じて進められる「観客中心の論証」によって、視聴者は製作者の主張を信じ込んでしまうほど説得されることがある。

(3) 主題中心の論証

当然ながら、映像作品は主題そのものについての論証も行う。「主題中心の論証」は、製作者の訴えたいことにかなう具体例が用意されたり、主題に関する特定の集団によって共有された信念に訴えかけられたりすることによって実践される。

さらにボードウェルとトンプソンによれば、レトリック形式のドキュメンタリー作品では、主題についての論証のために、修辞学における「省略三段論法」と呼ばれる演繹的な論証方法も利用される。省略三段論法が論証に用いられる作品では、まず問題が提示され、それに対してある特定の行動が取られることによって問題が解決に向かっていく様子が示される。その過程において、検証されなければならないはずの議論が省略されることがある。

このようにレトリック形式のドキュメンタリーでは、「情報源による論証」、「観客中心の論証」、「主題中心の論証」という三つの方法を用いて制作者のメッセージが伝えられる。そして、本稿で分析を行う『“不登校”44万人の衝撃』もレトリック形式のドキュメンタリー作品であり、不登校問題に関する制作者の考え方は上記の論証を通じて視聴者に届けられている。第3章は、映像分析を通して、視聴者を説得するために用いられた制作者の論証方法をひとつずつ明らかにしていき、総括することを目的としている。

第3節　日本のテレビ・ドキュメンタリー研究

第1節および第2節を通して、先行研究におけるドキュメンタリーの分類

を解説したが、ここまでまとめてきた先行研究は主に映画学に関するものに限られていた。しかしながら本稿で論じる『“不登校”44万人の衝撃』はテレビ・ドキュメンタリーであるため、テレビ・ドキュメンタリーの分野における本作品の位置付けも確認する必要がある。したがって本節では、先行研究をもとに日本のテレビ・ドキュメンタリーの歴史を振り返り、制作手法の違いに着目しながら、主要なテレビ・ドキュメンタリー制作者の思惑を明らかにする。特に、本稿の分析対象である『“不登校”44万人の衝撃』との関連が強いと考えられる、吉田直哉（1931-2008）というNHKの番組制作者を巡る議論に注目する。

日本のテレビ・ドキュメンタリーが誕生したのは1950年代後半である。1957年にNHKで放送が開始された『日本の素顔』は、日本初の本格的なドキュメンタリー番組であり、本論文で分析対象としている『NHKスペシャル シリーズ子どもの“声なき声”第2回「“不登校”44万人の衝撃」』はその後継にあたる。NHKの村上聖一と東山一郎によれば、最初期に『日本の素顔』の制作を担当したのは、1953年の入社後、4年間ラジオ番組を担当していた吉田直哉という番組製作者であった（村上、東山 2020）。吉田のドキュメンタリー番組制作手法の原点は、その4年間のラジオ番組を担当していた時代にさかのぼる。当時吉田は、社会的なテーマを扱うラジオ番組制作に利用された「録音構成」と呼ばれる手法に携わる機会があった。録音構成とは、「放送局の外で収録されたさまざまな人々の証言や現場の音声を編集し、ナレーションを組み合わせて1つの番組にする手法」のことである（村上、東山 2020, 60）。吉田はこの録音構成の手法をドキュメンタリー番組の制作に応用して、現場で撮影した映像によって伝えられる情報と後付けのヴォイス・オーヴァーによる情報を対比的に構成する[24]ことを意識した。吉田は自分の制作するテレビ・ドキュメンタリーにおいて、自身が「対位法」と呼んだこの構成方法を用いることと、仮説を設定して検証するという過程を重視す

24　撮影と同時に録音することができないという当時の技術的な問題を逆手に取った方法であった。

ることで、現在進行形の思考過程を提示することを目指した。これは吉田が、当時のドキュメンタリー映画（記録映画）を説得的であると批判的にとらえていたためである。

しかし日本のテレビ・ドキュメンタリー研究の第一人者である丹羽美之によれば、TBS の番組制作者であった萩元晴彦と村木良彦は、吉田の制作したドキュメンタリーにおいても、作り手や語り手が特権化されていると問題視した（丹羽 2020）。それは、吉田の作品中で議論の一貫性を尊重した映像の編集が行われたり、俯瞰的なナレーションが挿入されていたりしていたためである。二人は、テレビの意義を、吉田の作品のような啓蒙的な物語を作ることではなく、むしろ物語を都合よく生産する権力に対峙することであると考えた。彼らはその信念に基づき、論理的に一貫性のある編集を避けたり、中継性を徹底したりすることによって反物語的なドキュメンタリーを制作した。この種のドキュメンタリーは、制作者による干渉を取り除こうとする点において、ニコルズの分類にいわゆる観察型ドキュメンタリーに類似している。1960 年前後のフランスで、観察型ドキュメンタリーの一種の「シネマ・ヴェリテ（仏：*cinéma vérité*）[25]」が機材の発展と共に隆盛したことと同様に、彼らのテレビ・ドキュメンタリーの誕生にも同時録音技術の普及が関連していると考えられる。

前述したように、次章で分析する『NHK スペシャル シリーズ子どもの“声なき声”第 2 回「“不登校”44 万人の衝撃」』は『日本の素顔』を原点に持つ NHK の本格派ドキュメンタリーの流れを汲んでおり、『日本の素顔』の制作方法と同様に、現場の映像にヴォイス・オーヴァーを重ね合わせるという手法が採用されている。また、映像の編集やナレーションの挿入は論理的一貫性を保つように施されている。吉田の作品に対する萩元、村木の指摘を転用すれば、本稿の分析対象である『“不登校”44 万人の衝撃』も、特権化された作り手や語り手による解説的な作品であると推察される。したがって第 3 章では、制作者がいかにして作品の中で首尾一貫した主張を展開し、それを説き聞かせようとしているのかという点に注目して分析を行う必要がある。

25　ヴェルトフの「映画真実」（本章第 1 節参照）の仏語訳。

第２章では、ドキュメンタリーの概念を確認したうえで、先行研究に基づいてドキュメンタリーを巡る歴史的な議論を読み解いてきた。第１節では、ニコルズによるドキュメンタリーの分類をまとめた結果、製作者による、真実を描写するための理念や技法によってドキュメンタリーを六種に分化して見ることが可能になった。第２節では『フィルム・アート』におけるボードウェルとトンプソンのドキュメンタリー理論をまとめた。その中でも特にドキュメンタリー映画の形式に注目し、その一つであるレトリック形式における論証方法に留意して論じた。第３節では日本のテレビ・ドキュメンタリーの興りを振り返り、制作者の理念と手法を明らかにした。日本初の本格的なテレビ・ドキュメンタリーの制作者であり、『“不登校”44 万人の衝撃』の制作にも少なからぬ影響を及ぼしていると考えられる NHK の吉田直哉は、主題に関して現在進行形の思考過程を提示しつつも、未だ啓蒙的なドキュメンタリーを制作していたことが分かった。

第３章　映像分析

第３章では、第１章および第２章で論じてきた内容をもとに映像分析を行う。第１節では、テレビドラマ作品の分析を通して過去の映像作品における不登校表象を考察する。第１章で論じた不登校問題の三つの側面にのっとって、テレビドラマ作品における（1）不登校表象の呼称と規定、（2）原因論の変化、（3）不登校対策の変化について分析する。続く第２節以降は『“不登校”44 万人の衝撃』の具体的な映像分析を行う。第２節では、第２章を参照しながら、テレビ・ドキュメンタリー『“不登校”44 万人の衝撃』の概要を説明し、セグメンテーションを行う。続く第３節では、当作品に登場する不登校生徒の描かれ方を分析する。作品中の不登校生徒の神経質的な部分を強調した演出は、第１章第１節でまとめたような先行研究における「不登校」の語法にはそぐわないことを明らかにする。第４節では『“不登校”44 万人の衝撃』における学校状況の描かれ方に着目し、第１章第２節で分類した不登校現象の原因論を振り返りつつ、当作品で不登校問題の学校要因説が採用

されていることを示す。さらに第5節および第6節では、第1章第3節で取り上げた不登校対策に対応する分析を行う。第5節では、批判的に描かれている従来の学校状況とは対照的に「校内フリースクール」という取り組みが好意的に演出されていることを解説し、第6節では、不登校問題のさらなる解決策として「イエナプラン」という理念が一面的に紹介されている様子を共有する。第3節から第6節にかけてドキュメンタリー映像の部分の分析を行ったうえで、第7節では、『“不登校”44万人の衝撃』のキャスティングやスタジオのセッティングなど、ドキュメンタリー映像以外の部分の分析を行う。以上の過程をもって『“不登校”44万人の衝撃』における制作者の演出の戦略を総合的に読み解いていく。

第1節　過去の映像作品における不登校表象

本節では、過去の映像作品を通して不登校問題がいかに表象されてきたのか分析する。定量的な分析を行うために、この問題に関して何らかの名称を用いて呼称しているテレビドラマ作品を収集した。収集方法の概要は以下の通りである。

テレビドラマに関する日本最大のウェブサイトである『テレビドラマデータベース』（http://www.tvdrama-db.com/ 2023年1月1日最終閲覧）を中心に収集した。対象とした作品は、義務教育年齢の子供および学校に在籍している高校生、大学生に言及する際に、不登校現象、あるいは登校回避感情を示す用語が、タイトル、もしくは紹介文の中で使用されているものである。紹介文中に用語が含まれる作品のうち、制作年と、紹介文の書かれた年が異なると考えられる作品は除いた。アニメや、ドラマ仕立てのドキュメンタリーも含めた。なお、集計結果は付録として巻末に加えた。

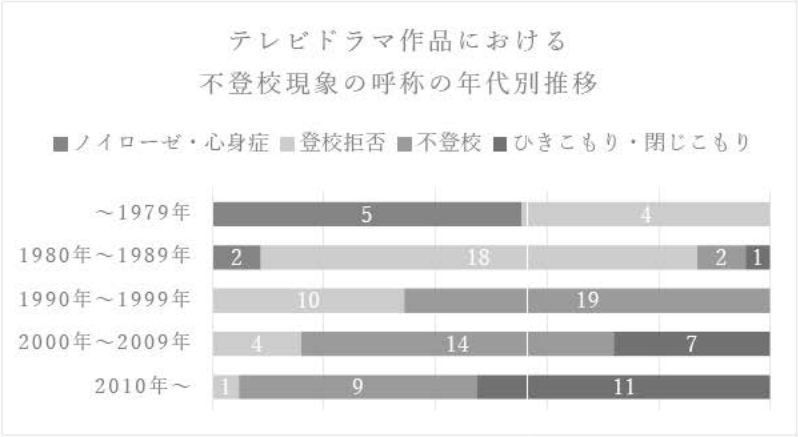
この集計をもとに、まず、テレビドラマ作品内の不登校現象の呼称の推移について統計的に提示する。続いて、テレビドラマ作品における原因論の変化について時系列に沿って考察する。最後に、テレビドラマ作品中に描かれる不登校対策の時代的な傾向の変化を明らかにする。三点の考察を通じて、過去のテレビドラマ作品における不登校表象の三つの側面は、第1章で論じた先行研究における不登校現象の歴史および現状の理解に通じていることを

立証する。

(1) テレビドラマ作品における不登校現象の呼称と規定

次のグラフは、テレビドラマ作品における不登校現象の呼称の割合を年代別に表したものである。第１章第１節で述べた不登校現象の呼称とその概念規定に照らし合わせながらグラフを見ていく。初めに、第１章では登場しなかった「ひきこもり」および「閉じこもり」という呼称について、不登校現象との関連を解説し、これら二つの用語を用いて不登校現象を呼称することは適切ではないと考えられることを示す。その後、その他の三つの呼称の使用状況が学界における不登校現象の呼称の変化と同じように推移していることを述べる。

表３：国内のテレビドラマにおける不登校現象の呼称の年代別推移（データ系列内の数値は項目ごとの作品数を示す。）



初めに、第１章第１節における不登校現象の呼称で解説しなかった、「ひきこもり」及び「閉じこもり（以下ひきこもりに統一）」という用語について記す。第１章第１節の中に「ひきこもり（社会的ひきこもり、英：*social withdrawal*）」という用語が登場しなかったのは、学界においてひきこもり

と不登校は切り離されて考えられる傾向が強いからである。教育心理学の研究者である村尾泰弘によれば、不登校生徒は（登校していなくとも）学校との社会的なつながりを持っていると判断されるため、ひきこもりであるとはみなされない（村尾編 2005）。ただしその一方で、社会学者の高山龍太郎は、1960 年代から 1980 年代にかけての不登校生徒のほとんどが自宅や自室に閉じこもっていたと述べている（荻野、川北、工藤、高山編著 2008）。この現象こそが、一部の不登校生徒を指す言葉として「ひきこもり」が使われるようになった原因であると考えられる。同様に高山によれば、1980 年代後半以降「登校拒否」や「不登校」という呼称の示す範囲があいまいになるにつれて、自宅へ閉じこもることのない不登校生徒が増加した。これによって、自宅に閉じこもる状態を伴う不登校生徒が取り分けて「ひきこもり」と呼ばれるようになったのではないかと考えられる。また、2000 年代以降にこの用語が頻繁に使われるようになった最大の原因は、1990 年代以降「ひきこもり」が社会問題として注目されるようになり、この用語そのものが市民権を得たことであると推察される。

以上のように、不登校現象を指す言葉として「ひきこもり」を使うのは基本的に誤用であると考えられる。そのため、ここからはグラフ内の「ひきこもり」以外の呼称に注目して呼称の変化を考察していく。

表 3 を見ると、不登校現象を示す呼称はおおよそ「ノイローゼ（独：*neurose* 神経衰弱、神経症を意味する。）・心身症」、「登校拒否」から「不登校」へと推移していることが読み取れる。第 1 章で述べたように、1960 年代前後の不登校研究の黎明期に用いられていた呼称は「学校恐怖症」である。ただし、同時期に不登校現象を主題にした作品は殆ど作られていないことから、当時の不登校現象は「学校恐怖症」という呼称が浸透するほど一般的に認識されたものではなかったと推測される。1970 年代に、この問題が社会で認められるようになると、テレビドラマでは「ノイローゼ」と「登校拒否」という呼称が使用されるようになる。ノイローゼとは日本語で神経症を意味する言葉であるから、「ノイローゼ」と「登校拒否」が併用された 1970 年代には、不登校であるか、もしくは登校回避感情を見せる子供たちは、映像作品

において神経症（あるいは神経症的）であるとみなされることが多かったと考えられる。しかし 1980 年代に入ると、「ノイローゼ」という呼称は使われなくなり、代わりの呼称は殆ど「登校拒否」に統一される。それぞれの作品によって登校拒否の要因や症状は様々であることから、「登校拒否」という用語は不登校現象を神経症的なものに限らず、広い意味で使用されたと考えられる。その後 1980 年代に「登校拒否」から「不登校」へ呼称を変えていった学界の後を追うように、1990 年代以降の作品では「不登校」という用語が頻繁に使われるようになった。「不登校」という呼称は、1980 年代における「登校拒否」の用法と同様に、様々な理由で登校していない子供やその状態を指す用語として広く使用された。以上のようなテレビドラマ作品における不登校現象の呼称の推移は、学界における呼称の推移に強く関連していると判断することができる。

現在、学界や公的機関、そして映像作品において「不登校」という呼称が使われるとき、この用語が対象とする子供たちは様々である。例えば、神経症的な生徒もいれば、非行や暴力行為に走る反抗的な生徒もいる。しかし、『“不登校”44 万人の衝撃』に登場する不登校の生徒たちはさほど多様であるように見えない。それは彼らが非常に繊細で神経質であるように特徴付けられて描かれているからである。本章第 3 節では、制作者がどのような演出を用いて不登校生徒の性質をこのように恣意的に規定しているのか明らかにする。

(2) テレビドラマ作品における原因論の変化

次に、第 1 章第 2 節を参照しながら、テレビドラマ作品における不登校現象の原因論の変化に注目する。第一に、学校恐怖症との関連が強い分離不安説にのっとって制作されたテレビドラマ作品は見当たらない。しかしそのほかは、あらかた「家庭要因説」、「学校要因説」、「社会要因説」の順に不登校現象が描き始められてきたと言える。

「ノイローゼ」という呼称が用いられていた時代に多くみられるのは、不登校現象を受験やテストに関連付ける作品である（付録 1:作品番号 1, 2, 4, 5, 8)。このような作品群には神経症的な性格の子供や、教育熱心で過干渉な母

親が頻繁に登場する。これは、高木や佐藤が、子供や親の性格特性を不登校現象の原因と考えていたことと同様である。さらに 1980 年代前半には、家庭内暴力を伴う不登校生徒が描かれるようになり、子供の情動的な性格が強調されるようになった（同 9, 10, 18）。このことから、子供の性格や家族の関係性に要因があると考えていた当時の学界の風潮が映像作品にも浸透していたことが分かる。その後、1980 年代後半から 1990 年代にかけては、学校内の問題に目を向ける作品が増えてくる（同 28, 31, 32, 37, 44, 49, 56）。学校の抱える問題としては、いじめや友人関係の問題に加えて、体罰や校則を巡る教師との衝突などが描写されてきた。不登校現象の要因として学校状況を問題視する考え方は、1980 年代の渡辺や奥地の思想と共通していると言える。近年は森田の説のように、子供の私事化が不登校現象の要因として描かれる作品も散見される（同 36, 81, 84）。例えば、塾で学ぶために不登校を選択する生徒の登場は、将来のための自己実現の場としての学校への結びつきが弱まっていることを示している。このように現代社会の私事化の結果、なぜ学校に行くのかという問いに対して明確な答えを見つけられなくなった子供たちもテレビドラマ作品に登場するようになった。

以上の考察から、テレビドラマ作品における不登校現象の原因論の変化は学術的な原因論の受容の歴史に殆ど等しく、家庭要因説、学校要因説、社会要因説が順々に展開されてきたということが分かった。ただし、近年の作品の中に家庭要因説や学校要因説が全く描かれないという訳ではないことには注意が必要である（同 88, 97, 107）。本章第 4 節の分析では、『“不登校”44 万人の衝撃』で他の説に触れることなく学校要因説が採用され、学校状況に問題があるということを伝えるための演出戦略が展開されていることを明らかにする。

(3) テレビドラマ作品における不登校対策の変化

テレビドラマの中では不登校現象の原因追究が目的とされず、解決志向となっている作品も多い。そのような状況の下で、テレビドラマ作品における不登校対策の変化も、先行研究をもとに説明した実状をある程度反映している。つまり第 1 章第 3 節の冒頭で述べたように、治療を中心とした対策から、

不登校生徒もありのままに受け入れられる空間を用意するという対応に変化してきたという訳である。

1980 年代までは、不登校対策として病院での軟禁療法や、精神治療が描かれている（付録 1：作品番号 9, 11, 19）。さらに治療の場は病院には限らず、不登校生徒が一時的に塾や山村に預けられる作品も見られる（同 12, 14, 29）。この場合の塾等は不登校の子供を受け入れる場というよりは、不登校の子供を正常に戻すための積極的な手段としての意味合いが強いことに注意が必要である。このように従来の不登校対策では、学校社会から逸脱した子供を治し（直し）、元の正常な状態に戻すというものが一般的だった。しかし 1990 年代から、保健室登校などの別室登校や夜間登校が作品中に登場するようになる（同 51, 74, 85,）。これらは、子供たちが通常学級へ再び登校できるようになるための一時的な避難の場である。再登校を最終的な目標としていても、子供を積極的に直そうとはしない点が特徴的である。時をほぼ同じくして、フリースクールもテレビドラマに描かれ始める（同 63, 65, 82, 107）。第 1 章第 3 節で確認したように、フリースクールでは子供に再登校させることよりも、不登校の子供に対応した居場所となることが意識される。このような志向の根底には、子供に合わせて社会の問題部分を変革するべきであるという考え方がある。このように 1990 年代以降のテレビドラマ作品では、不登校の子供を変えようとするのではなく、彼らがそのまま受け入れられるように対応していくという形の不登校対策がしばしば見られるようになった。

『“不登校”44 万人の衝撃』では、不登校生徒をありのままに受け入れようという考え方に基づいて、学校改革の必要性が訴えられている。また、不登校対策の観点から新しい学校を構築するためのアイデアとして、校内フリースクールという取り組みとイエナプランという教育理念が紹介される。本章第 5 節および第 6 節では、それぞれ校内フリースクールとイエナプランの演出に注目し、制作者が不登校対策としてのこの二つの概念をいかに肯定的に描き出そうとしているのかという点を分析する。

本節では、不登校現象が描かれた過去のテレビドラマ作品の分析を行った。

その結果、不登校現象の呼称とその範囲、不登校現象の原因論、不登校対策という三つの観点において、第1章で先行研究をもとに明らかにした不登校現象の歴史と、映像作品における不登校表象には繋がりがあるということが明らかになった。しかし『“不登校”44万人の衝撃』では、不登校現象の歴史的な議論が幅広く公平に描かれることはない。次節以降は具体的な分析を通じて、同作品における演出が不登校現象の実情をどのように切り取って視聴者へ届けているのか解き明かしていく。

第2節『“不登校”44万人の衝撃』の概要

本節の目的は『“不登校”44万人の衝撃』の概要を説明し、第3節以降の分析を円滑に進めるための準備を行うことである。本節は（1）『“不登校”44万人の衝撃』の概要と、(2)『“不登校”44万人の衝撃』のセグメンテーションに分けられる。(1)『“不登校”44万人の衝撃』の概要では、まず当作品における「不登校」の定義と番組構成を説明し、出演者や関係者に関する情報を紹介する。それに続いて、第2章でまとめたドキュメンタリーの先行研究をもとに当作品の属性を検討する。(2)『“不登校”44万人の衝撃』のセグメンテーションでは、当作品を場面ごとに分割し、番組内容を文字に書き起こす。映画の分析手法について詳しく解説したボードウェルとトンプソンによれば、セグメンテーション（英：*segmentation*）とは、「分析のために作品を分割するプロセス」である。セグメンテーションを行うことによって、作品の全体的な構成を把握するだけでなく、部分間の関係性を理解し、進行する出来事の展開を理解することができるようになる。

(1)『“不登校”44万人の衝撃』の概要

『NHKスペシャル シリーズ子どもの“声なき声”第2回「“不登校”44万人の衝撃」』とは2019年5月30日にNHKで放送されたドキュメンタリー番組である。『NHKスペシャル』とは、第2章第3節で述べたように日本初の本格的なテレビ・ドキュメンタリー『日本の素顔』の後継にあたるNHKのドキュメンタリー番組である。シリーズ「子どもの“声なき声”」[26]とは、「教

26　シリーズ「教室の声なき声」と呼ばれている場合もある。

室では口にすることのできない子どもたちの本音、“声なき声”に耳を傾ける２本シリーズ」である[27]。本稿で分析する作品はその第２回にあたり、不登校に向き合う教育委員会や学校の模索を伝えつつ、不登校の子供たちの生の声を届けることを放送の目的としている。

さて、見てわかるように『“不登校”44 万人の衝撃』においては「不登校」という用語が使用されている。しかし、その定義は番組独自のものであり、狭義のものと広義のものに分けられる。番組における「不登校」の使用例のうち、狭義の不登校は文部科学省の定義[28]に準じたものである。一方、広義の不登校には、狭義の不登校に加えて「隠れ不登校」と呼ばれる子供たちが含まれている。「隠れ不登校」と呼ばれているのは、公益財団法人の調査で発見された「不登校傾向にある子ども」[29]である。作品中で描かれている「不登校」の中学生の多くは狭義の「不登校」生徒ではない可能性が高いため、第３節以降の作品分析で「不登校」という用語を使用する際は、基本的に広義の「不登校」を示すこととする。

番組構成は次の通りである。番組は、ドキュメンタリー部分、スタジオからの生放送、トークライブ会場からの中継の三つの部分に分けられる。番組の大半を占めるドキュメンタリー部分は主に、１年間にわたって行われた広島県の学校現場への密着取材の映像によって成り立っている。ドキュメンタリー部分の合間に挿入されるスタジオからの生放送では、５人の出演者による対話と、７人の若い不登校経験者[30]による SNS 上のやり取りが提示された。さらにスタジオからの生放送の途中で、トークライブの中継が行われた。このトークライブは、日本財団が開催した『# 学校ムリかも トーク on

27　NHK『シリーズ 子どもの“声なき声”第１回「いじめと探偵 ～行き場を失った“助けて”～」』（https://www.nhk.or.jp/special/detail/20190519.html 2023 年１月１日最終閲覧）

28　第１章第１節参照。

29　日本財団「不登校傾向にある子どもの実態調査」（https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/information/2018/20181212-6917.html 2023 年１月１日最終閲覧）

30　詳細の素性は不明である。

Twitter』というもので、『“不登校”44万人の衝撃』と連動しつつも、番組から独立して行われたものである[31]。より具体的な番組内容の説明は(2)『“不登校”44万人の衝撃』のセグメンテーションで行う。

主な出演者は次の通りである。

表4：ドキュメンタリー部分の主な出演者（敬称略）

斉藤弘樹	撮影当時は広島県教育委員会豊かな心育成課指導主事であり、2021年4月時点では広島県熊野町教育指導監である[32]。中学教諭時代には、広島大学大学院に所属して中学生の国際交流プロジェクトに携わった[33]。
平川理恵	撮影当時および2023年1月現在も広島県教育委員会教育長である。神奈川県の公立中学校校長時代に不登校対策として「校内フリースクール」の先駆けとなる「特別支援教室」を整備した。「広島県の公教育を良くしようと猪突猛進となってしまった」結果、現在は自身をめぐる官製談合疑惑が取り沙汰されている[34]。
谷本昌宏	密着取材の対象となった広島県福山市立城東中学校の校内フリースクール担当教諭である。
りゅうせい	城東中学校の校内フリースクールに通う中学3年生の生徒である。
しおり	同じく中学2年生の女子生徒である。

『“不登校”44万人の衝撃』において斉藤指導主事と平川教育長は対照的に描かれている。前者については第3節、後者は第4節で詳しく論じる。特

31　日本財団「「#学校ムリかも」に集まった声を不登校経験者のしょこたんらが真剣にトーク」（https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2019/32222 2023年1月1日最終閲覧）

32　熊野東中学校ウェブページ（http://www.kuma7111.ec-net.jp/diary4.htm 2023年1月1日最終閲覧）

33　中国新聞「日米の中学生が熊野筆で絵手紙『夢』テーマ 筆の街交流館で展示会 広島」（https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=53772 2023年1月1日最終閲覧）

34　読売新聞「平川氏に物言えぬ風土」（https://www.yomiuri.co.jp/local/hiroshima/news/20221223-OYTNT50120/ 2023年1月1日最終閲覧）

に、斉藤指導主事に関しては、『“不登校”44万人の衝撃』以外の情報源からは中学生の教育に親身になって取り組んでいる印象を受けるが、同作品では、中学生と心を通い合わせられない人物の典型として描かれる。谷本教諭、りゅうせいくん、しおりさんは校内フリースクールの描写において、特に焦点を当てられている3人である。

スタジオの出演者およびトークライブ会場の出演者は以下の通りである。後者は『“不登校”44万人の衝撃』の制作者による人選ではない可能性が高い。

表5：スタジオの出演者（敬称略）

高橋美鈴	キャスター。NHKのアナウンサー。
茂手木涼岳（りょうが）	全国不登校新聞社編集員。不登校経験者7人によるSNSトークを進行している。
平田オリザ	演出家。教育者。16歳の時に定時制高校を休学し世界一周旅行に出かける[35]。
富田望生（みう）	女優。放送当時19歳。福島県出身。東日本大震災により東京への転校を経験している。
苫野一徳（いっとく）	熊本大学教育学部准教授。哲学者。教育学者。異年齢学級を推進している[36]。

表6：トークライブ会場の出演者（敬称略）

中川翔子	タレント。不登校経験者。
石井志昂（しこう）	全国不登校新聞社編集員。現在は、同社代表[37]。不登校経験者。
ベル	文学ユーチューバー。不登校経験者。

35　青年団「平田オリザ略歴」（http://www.seinendan.org/hirata-oriza/chronologic 2023年1月1日最終閲覧）

36　朝日新聞グローブ「「同じ中身を同じ学年で」は時代に合わない　「学級」を変えれば教育は変わる」（https://globe.asahi.com/article/12699615 2023年1月1日最終閲覧）

37　不登校新聞「NPO法人全国不登校新聞社とは」（https://www.futoko.org/introduction/ 2023年1月1日最終閲覧）

スタジオにおけるトークは、基本的にキャスターの問いかけに対して、平田オリザ、富田望生、苫野一徳の3人が発言するという形で進められる。平田、苫野は教育現場を知る有識者として情報を提供する一方、富田は若い世代の一人として自身の学校生活の経験を伝える役割を担っている。トークライブ中継では、SNS上でライブ配信を行いながら不登校経験者のつぶやきを取り上げている3人が、つぶやきを選んで紹介し、自身の意見を述べるという形になっている。

次に『“不登校”44万人の衝撃』の主な取材協力者として全国不登校新聞社とリヒテルズ直子の二者を紹介したい。全国不登校新聞社は不登校を専門にした新聞を紙媒体およびウェブ上で発行しているNPO法人である。全国不登校新聞社の設立者である奥地圭子は、第1章の第2節および第3節でも述べたように、学校要因説の代表的論者であり、フリースクール「東京シューレ」の設立者である。『“不登校”44万人の衝撃』と全国不登校新聞社の密接な関係からは、本作品が学校要因説をとっていると推測することができる。また、リヒテルズ直子は、第1章第3節で述べたように、オランダのオルタナティブ教育を日本に紹介した人物である。彼女に取材協力を仰いでいるということは、『“不登校”44万人の衝撃』において、オルタナティブ教育の一種であるイエナプランが否定的に描かれる可能性は低いと推しはかることができる。

最後に、第2章のドキュメンタリー研究を参照しながら、『“不登校”44万人の衝撃』の作品形式を確認しておく。本作品におけるドキュメンタリー部分は、映像による情報伝達と音声による注釈の挿入で組み立てられている。すなわち、このドキュメンタリーは解説型ドキュメンタリーの形式を軸に構成されているということである。したがって映像のモンタージュやヴォイス・オーヴァーによって語られる内容を分析することで、背景にある制作者の主張を読み取ることが可能になり、制作者が、視聴者にどのような印象を植え付けようとしているのか明らかにすることができる。

一方で、進行役のキャスターによって、不登校の子供たちや不登校経験のある人々の生の声が引き出されている様子は、参加型ドキュメンタリーの形式を思い起こさせる。キャスターの手元には台本が用意されていることから、

スタジオ部分では制作者の戦略がキャスターを通して実行されると考えられる。このことは、スタジオにおける制作者の演出戦略を分析することの必要性を示唆している。密着取材に基づく映像以外の分析を行うことで、制作者の訴えようとしていることがどのように補強されているのか理解することができるようになると考えられる。

(2)『“不登校”44万人の衝撃』セグメンテーション

ここでは、全体の内容を可視化して、分析を円滑に進めていくためにセグメンテーションを行う。本稿では、オープニングをアルファベット大文字の「O」、エンディング・クレジットを「E」、スタジオ部分およびその中のトークライブ中継を「S1, S2, …Sn」、その他の区分を数字で表記する。さらに、それぞれの主要な場面を構成する一つ一つのシーンを小文字のアルファベットで表す。

O. オープニング

1. プロローグ（00:00:04）

a. みさきさん（仮名）が体育館を覗く。その後、落ち込んだように座り込む。

b. みさきさんが廊下に座り込んでいる。

c. シリーズのタイトル。

d. 無人の教室のイメージ映像。テロップによる不登校に関するデータ。

e. 3人の生徒が不登校について語るインタビューの切り取り。

f. りゅうせいくんが廊下を歩く。整列して歩くほかの生徒たちとすれ違う。教師の怒鳴り声が響く。

g. まきさん（仮名）が廊下から校内フリースクールに逃げ込んでくる。

h. 女子生徒が廊下でテストを受けている。

i. しおりさんが体育館の後方に座っている。

j. 生徒たちが教室で授業を受ける。

k. 平川教育長のインタビューの切り取り。

l. りゅうせいくんが校内フリースクールでうなだれる。

m. タイトル。

S1. スタジオ（00:03:08）

a. スタジオ：不登校生徒数および「隠れ不登校」の説明。

b. トークライブ：トークライブの概要説明。

c. スタジオ：取材の概要説明。

2. 学校の現状と問題（00:09:06）

a. 生徒たちが校門に整列して挨拶している。別の生徒がそこを通り登校する。

b. 全校生徒が体育館で整列して一礼する。

c. 生徒たちが教室内でテストを受けている。一人の生徒が廊下で受けている。

d. 男子生徒が廊下にたむろする教師たちのそばを通り抜け校長室に駆け込む。

e. 上記の男子生徒が校長室で泣きじゃくり、教師たちが慰める。

f. はるかさん（仮名）が印刷室で一人、自習をしている。

g. まきさんが廊下から逃げ込む。座ってため息をつく。インタビューを受ける。

h. 広島県の不登校に関するデータ。

i. ゆうすけくん（仮名）のインタビュー。

k. 斉藤指導主事が校門であいさつ運動に参加する。

l. 教師が生徒に遅刻しないよう注意し、一部の生徒が走って登校する。斉藤指導主事が笑顔で挨拶をする。

m. 斉藤指導主事と教師が授業と教室を視察する。

n. 斉藤指導主事が歩きながらインタビューに対応する。

o. 校舎の外観。

p. 生徒たちが黙働流汗清掃に取り組む。開始前に生徒たちは黙想を行う。終了後女性教師が掃除中の態度のチェックをする。斉藤指導主事が後ろで眺めている。生徒たちは教師に向かって感謝の

お辞儀をする。

q. 小西宏明教諭が廊下を歩く。生徒に挨拶をする。

r. 小西教諭が授業を行っている。

s. 小西教諭が相談員から生徒の欠席の連絡を受ける。

t. 小西教諭が生徒の日誌をチェックする。

u. 小西教諭がインタビューを受ける。

v. NHK が行ったアンケートの結果。

w. アンケートの回答の朗読。

S2. スタジオ（00:19:47）

a. スタジオ：学校の嫌なところについて出演者が語る。規律的な制度の批判。

b. トークライブ：スクールカーストについて。

c. スタジオ：学校における複雑な人間関係について。

3. 校内フリースクールという新しい取り組みについて（00:30:46）

a. 平川教育長が県庁で新しい不登校対策についての発表を行う。

b. 平川教育長が学校を視察している。

c. 平川教育長が校長を務めていたころの神奈川県の公立中学校の特別支援教室の様子。

d. 平川教育長がインタビューを受ける。

e. 平川教育長の対策方法を取り入れた福山市の取り組みの紹介。

f. 校内フリースクールでかずやくん（仮名）に谷本教諭が話しかけている。

g. ふれあいルームでのしおりさんの様子。学校の嫌なところについて語る。修学旅行に向けて学習している。インタビューに答える。

h. しおりさんと谷本教諭が修学旅行の準備をする。谷本教諭が生徒たちについて語る。

i. しおりさんが学校に遅刻したことを谷本教諭がカメラに伝える。

j. しおりさんが遅れて登校してくる。修学旅行へ向けた校内の発表会へ向かう。

k. 生徒たちが発表している。しおりさんは体育館の後方にうつむいて座っている。

l. 修学旅行に出発する。母親と共に学校に来る。谷本教諭が見送る。谷本教諭がしおりさんに期待する。

m. 修学旅行先での集合写真。休みがちになったことが伝えられる。

n. しおりさんについてのインタビューに谷本教諭が答える。

o. りゅうせいくんが登場する。

p. りゅうせいくんが計算問題に取り組む。高校の志望理由を書く。

q. りゅうせいくんがインタビューを受ける。

r. りゅうせいくんが机を掃除する。

s. りゅうせいくんが高校の入学願書を書く。谷本教諭と話し合って休憩する。

t. 谷本教諭がインタビューを受ける。

u. りゅうせいくんが願書を完成させる。谷本教諭が褒める。

v. りゅうせいくんが寒がる子に上着を貸す。空腹の子におにぎりを作ってあげる。

w. 谷本教諭がりゅうせいくんともう一人を見送る。その後インタビューを受ける。

S3. スタジオ（00:45:36）

a. スタジオ：個人に合わせて支援することの重要性を論じる。

b. トークライブ：学校の授業についていけない生徒たちの悩みについて。

c. スタジオ：一律的な教育の限界について。

4. イエナプランの紹介（00:55:26）

a. 平川教育長が学校を視察する。

b. 平川教育長が広島県都市教育長会で海外の教育事例を報告する。都市教育長たちが話を聞く。

c. 平川教育長がインタビューを受ける。

d. 上空を飛ぶ飛行機からのオランダの映像。

e. オランダ人の男性が校章の紹介をする。

f. 勉強する子供たちの映像とイエナプランの紹介。
g. 視察団一行がオランダ人男性の説明を聞く。
h. 勉強する子供たちの映像とイエナプランの紹介。
i. 1970 年ごろのオランダの授業の様子。イメージ映像。
j. 視察団一行がオランダ人男性の話を聞く。
k. 子供たちが親に向かって発表を行う。
l. オランダ人の少年がインタビューを受ける。その後授業を受けている。
m. オランダの街並み。
n. 教育委員会の大人たちがレストランで話し合う。

S4. スタジオ（01:02:34）
a. スタジオ：SNS トークの参加者と出演者がイエナプランを絶賛する。
b. トークライブ：未来の学校の在り方について。
c. スタジオ：学校が変われるかどうか議論する。富田望生による朗読。

5. エピローグ（01:15:16）
a. 学校の外観。
b. 卒業式が執り行われる。りゅうせいくんが参加する。谷本教諭が眺める。
c. 体育館の外でしおりさんや谷本教諭らがりゅうせいくんと彼の母親らしき人を迎える。
d. しおりさんが泣き、りゅうせいくんが泣く。母親らしき人も泣いている。
e. 谷本教諭らが拍手で称える。

E. エンディング・クレジット

第 3 節　不登校生徒の規定―弱者や被害者として

第 1 章第 1 節で述べたように「不登校」という呼称に備わる概念規定は幅広く、不登校現象には神経症的なものもあれば、非行を伴うものや、積極的

な意思に基づくものもある。しかし、本節で明らかにするのは、そのような実情とは対照的に『“不登校”44万人の衝撃』において不登校生徒の性格を固定観念化しようとする演出が展開されていることである。具体的に言えば、当作品では不登校生徒の繊細で神経質的な部分が強調されている。生徒たちの学校生活は悲劇的に描かれ、不登校問題を抱える生徒たちを弱者として印象付けようとする試みが散見される。本節では、(1) 不登校生徒と陰鬱な背景、(2) 不登校に関連するネガティブなモチーフ、(3) 強迫的に映る手のクロースアップに注目して、不登校生徒をめぐる陰湿な演出戦略を読み解いていく。

(1) 不登校生徒と陰鬱な背景

『“不登校”44万人の衝撃』は、オープニングのあと、制服姿で体育館の外に座り込んでいる女子生徒が映るところから始まる（1a)。「いま、不登校の子供たちが増え続けています。中学二年生のみさきさんもその一人です。」という最初のヴォイス・オーヴァーに促されるように、プロローグでは3分間にのべ8人の不登校生徒が続けざまに登場し、視聴者に不登校の実情を伝える存在として映し出される。まずは、そのプロローグにおける不登校生徒が、どのように演出されているのか考察していく。

図1：陰影と座り込むみさきさん
（1b. 00:00:30）

図2：暗く無人の教室
（1e. 00:01:17）

プロローグの映像では、生徒とその背景にあるものの関連によって生徒たちが置かれている暗澹たる状況が暗示される。初めに、みさきさんが廊下に一人座り込んでいる場面に目を向ける（1b, 図1参照)。この場面の彼女は、ロング・ショットによってフレームの右下にとらえられている。舞台は校舎

の中であるにもかかわらず教室や廊下の灯りはともされていないため、画面の大半は陰影に支配されている。この場面では、重苦しい学校状況の中でうずくまる生徒という構図が比喩的に表現されている。同様に、生徒３人が学校に関する自らの感情を説明しているインタビューの音声が流れる場面の背景にも注目する（1e, 図２参照)。ここで背景に使われているのは、陽射しが微かに差し込むだけの無人の教室のイメージ映像である。画面上に生徒の姿こそ表されないものの、視聴者は、暗くおどろおどろしい教室と懊悩する生徒の声に因果関係があるように感じさせられる。

図３：後方に座り込むしおりさん
(1i. 00:02:05)

図４：廊下でテストを受ける生徒
(1h. 00:01:53)

また、生徒とその背景の関係性によって、学校の中で孤立する生徒たちの姿も強調されている。その際には、視聴者の同情を誘うように不登校生徒が撮影されている。第２章第２節で論じたように、レトリック形式のドキュメンタリーの論証方法には、観客の感情に訴えかけるというものがある。次に解説する場面では、不登校生徒は憐れむべき子供たちなのであるという制作者の見解が、喚情的に視聴者へ訴えかけられる。例えば、廊下でテストを受けている生徒は、ロング・ショットによって、あえて教室の中でテストを受けている一般の生徒たちと同時にフレームの中におさめられている（1h, 図４参照)。しおりさんが体育館の後方に座り込んでいる場面では、しおりさんにフォーカスを選択することで、フレームの右方三分の一に大きく写り込んでいる一般生徒との距離感が強調されている(1i, 図３参照)。これらのシーンは集団から孤立してしまっている不登校の生徒たちを際立たせている。その痛々しい様子は視聴者の同情を誘い、視聴者は不登校の子供たちを救わな

ければならないと考えるようになる。

図５：シリーズ・タイトル
（1c. 00:00:46）

図６：作品タイトル
（1m. 00:03:07）

(2) 不登校に関連するネガティブなモチーフ

プロローグからセグメント２にかけて現れるアートワーク(図版)やテロップも視聴者の感情を揺さぶるという意図をもって使用されている。例えば、シリーズ・タイトル及び本作品のタイトルには有彩色が用いられていない(1c, 図５参照、1m, 図６参照)。また、どちらの文字の塗りつぶしも均一ではなく、かすれていてすさんだ印象を与える。それに加えて、作品タイトルのアートワークでは、心電図を想起させる波形が徐々に異常な形態を表し、タイトルを巻き込みながら無秩序に崩壊していくグラフィクスが使用されている（1m, 図６参照)。また、不登校に関する用語やデータの紹介の際に提示されるテロップは濃色から黒にかけてのグラデーションによって塗りつぶされていて、画面上に重苦しさを提供している（図７参照)。これらの事例を見ると、カメラで撮影した映像以外の視覚情報にもネガティブなモチーフが絡められていることが分かる。そうすることで生徒たちの置かれた状況を悲劇的に演出しよう、という目論見が見受けられる。

図７：文字の塗りつぶし
(00:01:03)

(3) 強迫的に映される手のクロースアップ

不登校の生徒たちは被害者として描かれる傾向にある一方で、配慮すべき問題を抱えている弱者という型にはめられて映し出されることもある。手にクロースアップした映像が多く使用されていることに注目すると、生徒たちを神経質的で強迫的であるといったステレオタイプに当てはめようとする演出戦略が浮き彫りになる。当作品中にはプライバシー保護の観点から顔を出していない生徒がいたため、制作者は、顔の次に心理状態が表れやすかろう手にクロースアップを用いることで、生徒たちの性格を固定観念化しようとしたのであると考えられる。

図 8：指を動かすゆうすけくん
(2i. 00:13:07)

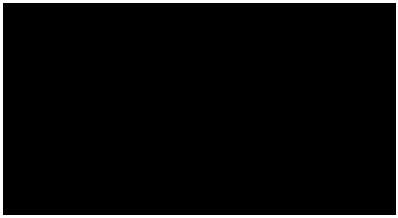


図 9：ファスナーを触るかずやくん
(3f. 00:34:10)

図 10：りゅうせいくんの左親指
(3p. 00:41:18)

図 11：執拗に文字を消す様子
(3s. 00:42:19)

ゆうすけくんのインタビューでは、彼が爪や指をいじる動作を見せた瞬間に、撮影方法がミディアム・ショットからクロースアップに移行する（2i, 図 8 参照）。クロースアップでかさぶたのできている手が映される時間は 20 秒にもわたる。指が不規則かつ細やかに動き続ける様子を強調することによって、神経症的で不安を感じやすい性格が印象付けられている。ほかに

も、かずやくんが通学カバンのファスナーの開閉を中途半端に繰り返している様子を見ると、やり場のない不安定な心理状態が伝わってくる（3f, 図９参照）。さらには、りゅうせいくんが書類の記載を行っている際に、左手の親指で紙をなぞるようなしぐさを見せている場面や、文字を必要以上に躍起になって消そうとする場面でも同様に手のクロースアップがスクリーンに現れる（3p, 図 10 参照、3s, 図 11 参照）。以上のように、手のクロースアップによって、不登校生徒が無意味に思えるような行為を繰り返さずにはいられない様子が強調される。このような演出を通して、制作者は不登校生徒の多くが強迫的な観念にとらわれてしまっているのであるという心象を視聴者にもたらそうとしている。

本節では、不登校生徒の背景の演出、ネガティブなモチーフ、そして手のクロースアップの３点に注目し、制作者の演出の意図を考察した。その結果、不登校生徒は悲劇的な状況に陥った被害者であり、心に神経質的で強迫的な問題を抱えた弱者であるという規定が制作者によって施されていることが判明した。しかし、ここで第１章第１節を振り返ると、「不登校」という呼称の概念は、神経症的なものに限らず、学校へ行けない（行かない）子供たちに幅広く適用されるものであるということが思い出される。したがって、制作者が多様な「不登校」の子供たちを描かず、弱者としての側面を一面的に描いたことは、不登校問題の実状に適しているとは言えない。それでは、次に、なぜ制作者が不登校生徒を弱者的存在として描いたのかということを考察する。次節では、規律的な学校状況の描かれ方に注目することで、そのような学校状況こそが、子供たちを悲劇的状況に追い込んでいる原因であると暗示されていることを明らかにする。

第４節　不登校の原因―従来の規律的な学校状況の強調

生徒たちが弱者という一面的な虚像に当てはめられて描かれている一方で、不登校問題の原因として問題視されているのは旧体質の規律的な学校状況である。制作者はセグメント２の前半を中心に、規律や秩序を重んじる従来の学校の在り方が不登校を引き起こしているという主張を、再び視聴者の感情に訴えかけながら展開している。つまり『“不登校”44 万人の衝撃』では、

第 1 章第 2 節で紹介した四つの原因論のうち、「学校要因説」が採用されているということである。本節では、(1) 学校における秩序、(2) 子供を思いやることのない教師たち、(3) 黙働流汗清掃、(4) 斉藤指導主事の描かれ方に着目し、学校状況の演出戦略を読み解いていく。

(1) 学校における秩序

セグメント 2 の前半には、生徒が整列している様子やものが正確に並べられている様子がちりばめられている。生徒たちは、朝の挨拶、集会、掃除といった学校生活の中で何度も整列させられ（2a, 図 12 参照、2b, 図 13 参照、2k, 2p）、スリッパや通学カバン、教材などの生徒に関するいろいろなものを所定の位置に並べさせられている（2b, 図 13 参照、2m, 図 14 参照）。このような秩序を重視している学校状況を不登校の問題に関連付けようとする意図は、特に学校集会の場面に明らかである（2b, 図 13 参照）。この場面では、福山市立城東中学校の前年の長期欠席者数がヴォイス・オーヴァーとテロップによって伝えられるが、画面では集会で礼をする生徒たちの姿がロング・ショットでフレーミングされる。生徒たちが足元に一律にスリッパを揃えて、10 秒近くにわたり長々とお辞儀をする様子は、抑圧的な学校生活を如実に表している。長期欠席に関するデータを伝えるヴォイス・オーヴァーに、規律や秩序を重んじる学校状況を端的に表している映像が重ね合わされているのは、制作者がその二つの事象に因果関係を見出そうとしているからである。

図 12：整列して挨拶する様子
（2a. 00:09:18）

図 13：集会のお辞儀。スリッパ。テロップ
（2b. 00:09:23）

図 14：並べられたバッグとファイル
（2m. 00:14:11）

(2) 子供を思いやれない教師たち

学校状況に不登校の原因を見出そうとする試みに伴って、プロローグからセグメント 2 にかけては、生徒に秩序を守らせようとする教師の言動も取り上げられている。例えば、廊下を整列して歩く生徒たちに対して、ある教師が「止まれ、そこ止まれ。じゃけんなんで一列じゃないんや。……」と怒鳴り声で指導する場面や、別の教師が、走って登校している生徒たちに対して「5 分前には教室だろ。急いで来い。急いで。」と命令口調で指導をする場面が確認できる（1f , 2l, 図 15 参照）。さらに、不調をきたして校長室に駆け込もうとする生徒をよそに談笑する教師たちや、生徒の姿勢を正そうと唐突に生徒の身体に触れたり、整頓されていない生徒の私物を勝手に触って片づけようとしたりする教師の姿も垣間見ることができる（2d, 図 16 参照、2m, 図 17 参照）。これらの場面からは、一部の教師たちは生徒たちの感情に無神経であるという印象がおぞましさと共に届けられる。

これらの場面は、教師によって規則が存在する理由が摯実に説明されることなく小手先の指導のみが先行しているという点で共通している。指導の結果として生まれる何かよりも規則を遵守させること自体に価値を置く教師たちの無思想性や、生徒たちが理不尽な規則に従わされている様子が強調されている。それに加えて、秩序を維持しようとする過程で、生徒たちが嫌がる行為をしてしまう鈍感な教師の様子を見せることで、教師の言動と生徒の感情の間にある溝が浮き彫りにされている。

図 15：登校指導の様子
（2l. 00:13:40）

図 16：逃げ込む生徒を見て笑う教師陣
（2d. 00:09:53）

図 17：突然身体を触る教師
（2m. 00:14:06）

図 18：勝手に私物に触れる教師
（2m. 00:14:25）

（3）黙働流汗清掃

そして、このような学校状況を最も象徴的に表すシーンとして提示されるのが黙働流汗清掃（もくどうりゅうかんせいそう）の様子である（2p）。黙働流汗清掃とは、子供に無言で機敏に掃除を行わせようとする取り組みのことである。

『“不登校”44 万人の衝撃』では、まず、掃除前に黙想を行う生徒たちの姿が画面に登場する。整列し、身体の中心で箒を持っている彼らの姿は、捧げ銃を行う軍隊のような厳格さを連想させる（図 19 参照）。その後、カメラは、床に這いつくばって掃除をさせられている生徒たちの目線に合わせるように移動しながら、感情を失ったような生徒たちの表情を映し出す（図 20, 21 参照）。同時に、「笑顔」という文字が大きく描かれているシャッターがちらちらと後方に映されることで、黙働流汗清掃を行う生徒たちが抑圧されている様子が対比的に強調されている。掃除が終わると、担当の教師は「無言もう少し徹底できるかな。たまに話をする人が 3 人ほどいたので気を付けてくだ

さい。」と注意する。掃除によってどのような結果がもたらされたのかということよりも、無言で掃除をしていたかどうかという点を気にする教師の発言は、学校状況がいかに規則にとらわれてしまっているかを象徴している。制作者によって教師の言動や黙働流汗清掃が否定的な印象と共に伝えられることによって、視聴者は規律や秩序の重視を一丁目一番地に置く学校運営に疑問を抱くように誘導される。

図 19：清掃前の黙想
（2p. 00:14:48）

図 20：跪いて掃除する生徒
（2p. 00:15:06）

図 21：「笑顔」と書かれたシャッター
（2p. 00:15:14）

(4) 斉藤指導主事

このように規律や秩序を重視する学校運営を進めている代表的な存在として描かれているのは、広島県教育委員会豊かな心育成課の斉藤弘樹指導主事である。本章第 2 節の概要で紹介したように、斉藤指導主事は教師をしながら大学院で教育を学び、中学生の国際交流を促進するなど、熱心な教育者と

しての一面がある。しかし『“不登校”44万人の衝撃』では、彼の教育熱心な側面は悪意を持って描写されている。同作品における斉藤指導主事の登場シーンに注目すると、撮影を通じて彼に威圧感を生み出すことでネガティブな印象をもたらそうとする戦略が見えてくる。

例えば、斉藤指導主事が学校視察に訪れて鞄やファイルが並べられている棚をチェックしている場面では、頭部にクロースアップしたショットよって彼の鋭い目つきが見せられる（2m, 図22参照）。同じように、前述の清掃の場面でも黙働流汗清掃の反省会を行う生徒と教師の後ろでその様子に目を光らせている様子が映し出される（2p, 図23参照）。さらに、階段で歩きながらインタビューが行われているシーンに目を向けると、胸から上のミディアム・クロースアップがロー・アングルで見上げるように撮影されていることにより、斉藤指導主事は威圧的な存在であるかのように印象付けられる（2n, 図24参照）。斉藤指導主事が登校指導をしたり校内を視察したりしている場面では、教師のそばに立っている様子が見られる一方で、生徒の近くで生徒の本心と向き合おうと努力している様子は見当たらない（2l, 図15参照、2m）。このようなシーンからは、斉藤指導主事の進める学校運営は厳格であり、生徒に寄り添ったものではないと制作者が訴えようとしていることがわかる。

プロローグからセグメント2の前半にかけては、規律を重視する学校の教師や制度を強調するだけでなく、教育委員会の担当者をスケープゴートにし、管理型の学校運営を進めている悪役として否定的に描くことで、このような学校状況に対する疑念を視聴者に抱かせようとする試みが見られた。その後のヴォイス・オーヴァーでは、校内の規律を守ることで不登校を減らそうとする取り組みを進めた結果、「広島県内の不登校の生徒の割合は一時減少したものの、再び増加」したことが伝えられる（2q）。さらに、このヴォイス・オーヴァーに続くセグメント2の後半では、減少しない不登校生徒への対応に苦悩する一人の教師の様子が映される。現在の学校状況について視聴者に切迫感を抱かせるような演出戦略は、先に述べたような「不登校の原因は規律重視の旧態依然とした学校状況にある」という制作者の主張を受け入れさせやすくするためのものであったことがここで明白となる。

図 22：鋭い目つき
（2m. 00:14:19）

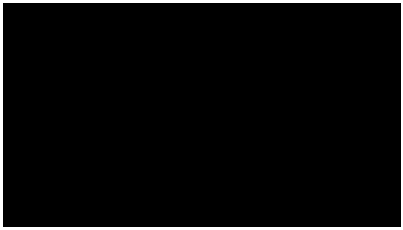


図 23：掃除の監視
（2p. 00:15:27）

図 24：下からのアングル
（2n. 00:14:33）

第 5 節　不登校対策（1）校内フリースクール―自由を尊重する新しい学校の形

ドキュメンタリーの後半は、広島県教育委員会の平川理恵教育長の取り組みを中心に構成されている。その取り組みとは、広島県内の中学校における校内フリースクールの運用と、オランダのイエナプラン校視察の二つである。校内フリースクールとイエナプランという二つの概念については、第 1 章第 3 節で論じた。それを照らし合わせながら、第 5 節および第 6 節を通して、不登校対策の演出を考察していく。校内フリースクールとイエナプランに共通する特徴としては、年齢による差が軽減され、異なる年齢や世代間でも対等に接し合えることや、個人に適した学びの追求を目指していること、そして厳しい規則がなく生徒の自由が尊重されていることが挙げられる。制作者は、ドキュメンタリーの後半部分を通して、新しく自由な学校環境を作り上げることで不登校生徒を救い出すことができるという主張を視聴者に受け入

れさせようとする。

本節では、一つ目の不登校対策として、主にセグメント3における校内フリースクールの描かれ方に注目する。第1章第3節でも述べたように、校内フリースクールとは通常学級での授業に参加することが難しい生徒を受け入れて自由な学びを目指す場である。以下では、まず、(1) 自由な空間としての校内フリースクール、(2) 新しい教師の姿という二つの観点から、校内フリースクールと従来の管理型の学校様式は対照的であるということが示されていることを示す。続いて、(3) 斉藤指導主事と平川教育長の対比、(4) 感動的な卒業式における演出を分析し、校内フリースクールという取り組みが肯定的に描かれていることを明らかにする。

(1) 自由な空間としての校内フリースクール

セグメント2では、規律を重視する従来の学校の様子が描かれるが、セグメント3では対照的に、校内フリースクールが自由な空間であることが強調される。例えば、しおりさんが椅子ではなく床に座って学習している様子や、空腹の生徒（年下）のためにみんなでおにぎりを作ってあげている様子が流れる（3g, 図 25 参照、3s）。さらには、作業中に疲労回復のため仮眠をとる場面もある（3s, 図 26 参照）。このように新奇な学校生活の一部を取り上げることで、校内フリースクールは管理型の教育を行ってきた従来の学校とは異なり、生徒の自由を尊重する先駆的な取り組みであるということが伝えられる。

図 25：床に座るしおりさん
（3g. 00:34:48）

図 26：作業中の仮眠
（3s. 00:42:42）

図 27：小西教諭のインタビュー
（2u. 00:17:52）

図 28：谷本教諭のインタビュー
（3n. 00:40:00）

(2) 新しい教師の姿

また、従来の学校の形式とは異なるということを伝えるために、セグメント 2 とセグメント 3 では教師の描かれ方にも違いがある。例えば、通常学級を受け持つ小西教諭のインタビューと、校内フリースクール担当の谷本教諭のインタビューでは、いずれの教師も不登校生徒の心情を慮ってこそいるが、映像の与える印象は同様ではない（2u, 図 27 参照、3n, 図 28 参照）。小西教諭は無機質な部屋の隅に座り低めのアングルでやや見上げるように撮影されている一方で、谷本教諭は煌々たる教室を背に目線と水平のアングルで撮影されている。そうすると、不登校生徒に真正面から洋々と向かい合っているという印象をより強く受けるのは後者である。また、小西教諭のインタビューには 7 秒間にわたり黙り込んでしまう様子が挿入されているため、最後まで滔々と語り続けている谷本教諭と比べて、不登校生徒に関する理解に乏しいのではないかという視聴者の憶測を誘う。二つのインタビューの演出の違いを分析すると、校内フリースクールの教師の方が、不登校生徒と近い距離感を保つことができているというメッセージが込められていると推察される。この推察を裏付けるように、谷本教諭が生徒と一対一で対話をしている様子がセグメント 3 には何度も現れる（3f, 3g, 3h, 3s, 3u, 3v, 3w）。さらにここでは、谷本教諭が生徒に寄り添っている場面を繰り返し映し出すことによって、生徒を一律に管理するのではなく、一人一人に向き合うという確信を持って生徒に対応している新しい教師の姿が強調されている。

さらに、谷本教諭は、セグメント2の前半に出てきた理不尽で横柄な教師たちとも対照的な存在として映し出されている。特に、入学願書を用意するりゅうせいくんに立ち会っている場面が象徴的である（3s, 3t, 3u）。疲労の見えるりゅうせいくんに休憩を提案したり、書類を短時間で完成させたりゅうせいくんを絶賛したりしている（3s, 図25参照、3u）。この二つのシーンの間では、「去年までだったら願書書けない子には『なにしよるん』とか『丁寧に書けよ』とかいう話もして、指導するような形で書かせていたけれども、実際に書けない子もいっぱいいるわけで。……」という、谷本教諭のインタビューが挿入されている。谷本教諭がりゅうせいくんの取り組みに向き合う姿から、校内フリースクールにおける教師は、規則に基づく厳格な指導を行うのではなく、生徒に合わせて柔軟で前向きな支援を行う形を目指していることが明確に伝えられる。

ここまで、セグメント3における校内フリースクールでの生活や、担当教諭の描かれ方を見てきた。その結果、制作者が伝えようとしているのは、平川教育長が推し進めている校内フリースクールという取り組みと、今まで子供たちを苦しめてきた従来の学校の様式が全く異なるということであると分かった。セグメント2では従来の学校運営が批判的に描かれていたことから、制作者は、校内フリースクールという取り組みには好意的であると推測できる。その仮定の検証には、校内フリースクールを推進している平川教育長と、従来型の学校運営を進めている（とされている）斉藤指導主事[38]の対照的な描かれ方に注目することが有効である。

38　第3章第2節参照。

（3）斉藤指導主事と平川教育長の対比

図 29：平川教育長のインタビュー
（3d. 00:32:10）

図 30：微笑みつつ生徒を見る平川教育長
（4a. 00:55:56）

前節で述べたように、斉藤指導主事は生徒に寄り添うのではなく、教師の側に立っていることが多い存在として描かれている。一方平川教育長の場合は、子供に笑顔で話しかけたり、空席に座って一緒に授業に参加したりしている姿を見ることができる（3b, 3c, 4a）。教室の後方で視察を行っているシーンを比較すると、斉藤指導主事は生徒と同時に画面に映りこむことはないが、平川教育長は、はじめ、複数の生徒と同じ画面内に映される（2m, 4a）。さらに、これらのシーンの双方に見られる二人の顔のクロースアップでは、斉藤指導主事の厳格な表情と、平川教育長の柔和な眼差しが対照的である（2m, 図 22 参照、4a, 図 29 参照）。学校視察の場面に加えて、二人のインタビューにおいても演出方法に大きな違いがある（2n, 図 24 参照、3d, 図 30 参照）。前述の通り、斉藤指導主事はロー・アングルで威圧的に描かれている。一方、平川教育長は水平なアングルで映されているため、視聴者に威圧感が与えられることはない。また、斉藤指導主事は廊下や階段を歩きながら手持ちカメラで撮影されているが、平川教育長はオフィスの中で固定されたカメラによって撮影されている。制作者は、より安定した映像を提供することで、平川教育長を信頼に値する人物であると信じ込ませようとしていると考えられる。

以上の分析から、制作者は、斉藤指導主事との対比を通じて、平川教育長を好意的に描こうとしていることが分かった。それはすなわち、平川教育長が推進する校内フリースクールという取り組みにも好意的であるということ

を意味しているといえる。このような制作者の見解は、ドキュメンタリーの結末を見ることでより明白になる。

(4) 感動的な卒業式

図 31：エンディング
(5e. 01:17:15)

エピローグに流れるのは、りゅうせいくんが参加している卒業式の場面である。卒業式は、ドキュメンタリーの大団円として感動的に演出されている。まずエピローグの始まりでは、卒業式で流れている『威風堂々』が華々しく聞こえてくる（5a, 5b)。プロローグからセグメント 4 まで一貫して流れていた希薄な存在感の電子音楽から一変し、視聴者を一気に高揚させる役割を担っている。また、卒業式の場面では常にりゅうせいくんが被写体として追われている（5b)。これは卒業式に堂々と参加するりゅうせいくんの様子を見せるだけでなく、会場全体の規律的な様子を印象付けないためであると考えられる。参列者が整列して着席している様子を極力映さないことで、感動的な雰囲気に水を差さないようにしている。最後に、卒業式直後のシーンでは、校内フリースクールのしおりさんや谷本教諭らがりゅうせいくんを出迎えている（5c, 5d, 5e, 図 31 参照)。ここではりゅうせいくんとしおりさんが感極まって涙を流す場面をドキュメンタリーの最後に挿入することで、感動的なエンディングを作り出そうとしている。このような喚情的な演出は、校内フリースクールが将来性のある取り組みであるという感想を視聴者に抱かせるためのものである。このことは、「一歩一歩、成長した子供たち。」というヴォイス・オーヴァーによって、りゅうせいくんの成長という校内フリースクールの成功例がいささか強引に普遍化されていることからもわかる。

セグメント３やエピローグに描かれた校内フリースクールにまつわる映像において、制作者は対比的な演出を用いて、校内フリースクールの様式を従来の管理型の学校運営とは異なるものであると強調しているということが分かった。さらには、平川教育長の描かれ方が好意的であることや、卒業式の場面が感動的に演出されていることを確認した結果、制作者が校内フリースクールの取り組みに好印象を抱かせようとしているということが明白になった。

第６節　不登校対策（2）イエナプラン―理想的な学校の姿

セグメント４では、平川教育長を中心とした一行のオランダ視察の様子が提示される。視察団一行はオランダで、イエナプラン教育を導入している学校を訪れる。第１章で述べたように、近年日本では不登校対策としてイエナプランが注目されているが、セグメント４におけるイエナプランの紹介方法に着目すると、制作者が効果的な不登校対策としてそのイエナプランを描こうとしていることが分かる。以下では、制作者の演出戦略を大きく二点に分けて分析する。一つ目は、イエナプランと既出の不登校対策である校内フリースクールの類似点が強調されていることであり、もう一つは、イエナプランが不登校の解決策として提示される中で数々の言説が省略されていることである。

(1) 不登校対策としてのイエナプランの可能性

第１章で解説したように、もともとイエナプランは不登校対策に特化した教育法ではない。しかし、番組では不登校問題を解決に導くための一手としてイエナプランが描かれている。このことは、イエナプランの視察へ向かう場面に、「どうすれば不登校をなくし、すべての子供の成長を支えることができるのか。」というヴォイス・オーヴァーが挿入されていることから明らかである（4d）。イエナプランと校内フリースクールの関連性は次の三点の情報の伝達により強調されている。すなわち、どちらの教育様式も、[1] 個人に合ったカリキュラムを選択できること、[2] 学ぶ場所を自由に選べるこ

と、そして［3］異年齢の学級編成であることである。

初めに、［1］個人に合ったカリキュラムを選択できることは、「ここ（校内フリースクール）では、登下校の時間や学ぶ内容を、生徒自ら決めることができます。」と、「イエナプランでは何通りもの教材やカリキュラムが用意され、自分に合う学び方を選んだ子供を教師がサポートします。」という二つの類似したヴォイス・オーヴァーによって伝えられる（3e, 4h）。第二に、前節で取り上げたように校内フリースクールでは床に座って学習している生徒がいることから、［2］学ぶ場所を自由に選べることがわかる。これは、イエナプラン校においても然様であることが、代表のオランダ人の「子どもたちに決まった席はありません。生徒が自分で心地のいい場所を選びます。立って学ぶ子もいます。」という説明から分かる（4g）。最後に、校内フリースクールが［3］異年齢の学級編成であることは、りゅうせいくんが年下の生徒におにぎりを作ってあげていたり、しおりさんが卒業生であるりゅうせいくんを出迎えたりしていることから判断できる（3s, 5c）。同様に、このような学級編成はイエナプランの特徴でもあることが、「異年齢のクラス編成」というテロップの提示と共に紹介される（4f）。このように、制作者は二者の類似点をもれなく解説することで、イエナプランが不登校対策である校内フリースクールと近い取り組みであると印象付けようとしていると考えられる。

(2) 議論されない懸念事項

ここでは、イエナプランが不登校問題の解決策となり得ることを主張するために幾らかの議論が省略されていることも銘記しておく必要がある。例えば、類似点がヴォイス・オーヴァーやテロップで説明されたこととは対照的に、イエナプランと校内フリースクールの間の隔たりは解説されない。視察先のイエナプラン校で学んでいる子供は、日本の小学校低学年に対応するくらいの年齢であるように見受けられるが（図 32 参照）、校内フリースクールが設置されているのは中学校である。セグメント 4 を通してこの違いに触れられることはなく、「イエナプランはどの年齢にも適応できるものである」という真偽不明の大前提に関する議論が省略されている。つまりここでは、

第 2 章第 2 節で論じた省略三段論法が用いられているといえる。イエナプラン教育は中学生にも問題なく適合するのであろうかという疑惑を視聴者に持たせないように論証が進められている。

図 32：イエナプランで学ぶ子供たち
（00:59:53）

図 33：教育委員会の議論
（4n. 1:01:28）

図 34：しおりさんの気持ち
（3g. 00:34:54）

また、異年齢学級そのものが抱える問題点についての積極的な議論も行われない。イエナプランのような異年齢学級では、年長者に多大な負担がかかったり、年長者が悪い模範になってしまったりする可能性があるという指摘があることを第 1 章で述べた。しかしドキュメンタリーでは、イエナプランに対する建設的かつ批判的な見解は視聴者に一切提供されない。イエナプランの是非に関して話し合う視察団の様子こそ流れるものの、その議論は論拠のない水掛け論に終始しており、「自分なりの勉強をする姿が本当にいいんですかね？」といった中身のない否定的意見が提示されるだけのまやかしである（4n, 図 33 参照）。

それに加えて、不登校対策としてイエナプランを導入する際の懸念事項も検討されない。イエナプランは、対話、遊び、仕事（学習）、催し（行事）という四つの基本活動で構成されており、集団活動が学校生活の根幹をなし

ている。しかし、しおりさんのように、「体育館とか教室とか、人が集まりすぎるのが嫌」な不登校の生徒も存在する（3g, 図 34 参照）。実際の社会のように人との関わりを重視するイエナプランの特徴は、必ずしも不登校の生徒の心情と相容れるものではないため、制作者はこの特徴を視聴者に伝えていない。以上の考察から、制作者は幾つかの議論を省略することで、イエナプランは不登校の解決策になり得るという主張の説得力を保とうとしていることが分かった。

このように制作者は、イエナプランの不登校対策になる可能性がある一面をところどころに提示する一方で、そうではない面を隠蔽しようとしている。このように、イエナプランに関する情報を恣意的に選択して伝えることで、イエナプランは不登校問題の解決策として有効であるという印象を視聴者に与えようとしている。

第 7 節　スタジオ分析

最後の分析となる本節では、トークライブ中継とスタジオ部分の分析を行うことで、番組を立体的に捉えることを目的とする。初めにトークライブ中継に注目して、(1) 強調されるフリップカードの内容が、従来型の学校状況を批判するものばかりであることを指摘する。この指摘によって、本章第 4 節で述べた、『“不登校”44 万人の衝撃』では学校要因説が採用されているという考察が補強される。本節の後半では、(2) スタジオのセッティングを分析し、子供を取り巻く理想の空間がスタジオに作り出されていることを明らかにする。スタジオは、温かみがあり、誰でも受け入れてもらえそうな様相を醸し出しており、自由や個性を尊重する校内フリースクールやイエナプランの理念を想起させる道具となっている。

(1) 強調されるフリップカード

トークライブは『“不登校”44 万人の衝撃』の制作者が主催しているものではないため、分析できる部分は限られている。ここでは、制作者の意図が反映されていると考えられるカメラの動きに注目することで、制作者のメッ

セージを読み取った。トークライブでは、事前に集められた 40 個ほどの不登校経験者のつぶやきがフリップカードに書き起こされ、出演者の後方のホワイトボードに表示されている。一つ一つを読み取ることは難しいが、トークライブの中継ではその中の四つのカードがクロースアップで映し出される場面がある（S3b）。以下に、その四つのつぶやき内容を記した。

表 7：不登校経験者のつぶやき

「みんなと同じようなレベルでできなければいけない…みたいな空気がしんどかった」 「授業ついていけないし みんな頭良すぎる 朝起きるのもしんどい」 「毎日予習、復習、それ以外に追われている。もう、自主退学するか、とも考えている。」 「集団行動とか同調圧力とか苦手な子の人権って踏み躙られてると思う」

四つのつぶやき内容の共通点について考察すると、全ての生徒に同水準の学力や画一的な行動を要求する学校のスタイルが登校回避感情を生み出しているというメッセージが含まれていることが分かる。このように、番組が様々な不登校経験者の声の中からこの四つを選択して強調したのは、同質性を高く保ち、秩序を守ろうとする学校状況を問題視しているからであると考えられる。このことは、本章第 4 節で論じた、『“不登校”44 万人の衝撃』で学校要因説が採用されているという考察をより真実らしくする証拠となる。

(2) スタジオのセッティング

他方、スタジオ内の家具や装飾品に注目すると、スタジオは制作者にとっての理想的な学校空間に影響を受けたデザインになっていることがわかる。ここで言うところの理想的とは、すなわち、温かみがあり、誰でも快く受け入れられるという性質のことである。

まず、スタジオ内の色彩に注目する。スタジオは総じて自然の温もりを感じさせる色合いで構成されている（図 35 参照）。例えば、フローリングに

は木目のものが使われているし、机や飾り棚は木製のものが選ばれている。極めて特徴的なのは、中央に置かれたスクリーンの縁やスタンドが木の色をしたカバーで覆われていることである。さらには、飾り棚のところどころに緑色の植物が生い茂っているように飾られているし、スタジオを照らす灯りは青白い人工的な色ではなく、黄昏時の自然光の様な色合いをしている。このように制作者は、自然を感じさせる色彩によってスタジオを温かみのある場所にしている。

図 35：スタジオの様子（1）
（01:14:41）

図 36：スタジオの様子（2）
（00:45:37）

また、座席配置や置物からは、スタジオが誰をも受け入れることのできる空間をイメージされたものであることが読み取れる。5 人の出演者は中心に置かれた飾りの机を扇状に囲い込むような形でソファに座っている（図 35 参照）。報道で用いられるようなデスクは使用されず、視聴者と対面で向き合うというよりは視聴者と共に円を形成するように座席が配置されている。出演者はゆったりとした椅子に座っており、圧迫感はない。このようなスタジオのセッティングは、温かく包み込まれるような印象を視聴者に与えるために定められていると考えられる。さらに、スタジオ中には地球儀、動物や楽器の置物、小型の仏像、昆虫標本など、様々な分野の象徴となるものが散りばめられている（図 36 参照）。これらは、個人の嗜好ひいては個性の尊重を意味していると推察される

このようにスタジオは、温かみがあり、誰もが受け入れられるような性質を持つようにセッティングされている。情け深く、個性が尊重されるような空間の演出は、学校も同じような空間となるべきであるという制作者の主張

が反映されたものであると言える。

トークライブとスタジオの部分を分析すると、不登校問題に関して、規律的な学校を批判的に捉え、自由と個性を尊重する学校を理想とする制作者の見解を再び垣間見ることができた。制作者のこの見解は、第3節から第6節にかけてのドキュメンタリー部分の分析で明らかにしてきたことと相違ない。このように番組全体を通して演出が施され、その演出に彩られながら一貫した主張が展開されていることが確認できる。

以上、第3章では不登校を題材とした映像の分析を行ってきた。第1節における分析は、過去のテレビドラマ作品における不登校の表象が、学術研究における不登校問題の理解を踏襲していたことを示した。第2節以降、『“不登校”44万人の衝撃』を分析した結果、次のことが分かった。まず、制作者によって特徴づけられる不登校生徒の性質が神経症的なものに限定されることで、弱者としての側面が強調された。次に、従来の規律的な学校状況が否定的に演出されることで、そのような学校状況が不登校の原因として暗示された。最後に、不登校対策として、校内フリースクールとイエナプランという二つの概念が紹介された。校内フリースクールに関しては、従来型の学校とは対照的な、自由で個に応じた学校様式の可能性が肯定的に提示された。一方でイエナプランに関しては、自由や個性を重視するという点が強調され、不登校対策としての可能性のみが一方的に解説された。

第1章を振り返れば、分析によって判明した番組内の不登校問題の表現は、必ずしもその問題の実状を正確に表したものではない。一般的に「不登校」と呼ばれる生徒たちは、神経症的であるとは限らないし、不登校の原因論も学校要因説だけではない。また、二種の不登校対策についても、批判的な議論が不十分であると見受けられる。しかしながら、『“不登校”44万人の衝撃』の制作者は、救われるべき弱者と取り除かれるべき悪因という構図を作り出したうえで、両者に跨る問題の解決策を提示するという分かりやすい演出を披露することによって、解説型ドキュメンタリーの至上命令である主張の説得的な展開を巧みに施している。

結論

本稿では、心理学、社会学および教育学の先行研究をもとに日本における不登校現象の歴史と現状を把握し、映画学とテレビ研究におけるドキュメンタリーの理論を踏まえたうえで、『NHK スペシャル シリーズ子どもの“声なき声”第２回「“不登校”44 万人の衝撃」』における不登校現象の演出を分析した。その結果、『“不登校”44 万人の衝撃』から三つの主要な演出の傾向をつかみ取ることができた。一つ目の演出の傾向は、「不登校」生徒の繊細で神経症的面が強調され、不登校生徒が被害者や弱者として規定されていることである。これは、第１章第１節で確認したような現状、つまり、「学校恐怖症」、「登校拒否」、そして「不登校」へと続いた不登校現象の呼称の変遷に伴って、不登校生徒の属性が拡大している現状に適していないと言える。二つ目の演出の傾向は、従来の規律的な学校状況が否定的に描かれていることである。第１章第２節では、不登校現象の原因論が「分離不安説」、「家庭要因説」、「学校要因説」、「社会要因説」の順に誕生してきたことを述べたが、『“不登校”44 万人の衝撃』では、学校状況の否定的な描き方により「学校要因説」のみが強調されていた。最後に、三つ目の演出の傾向は、不登校の解決策として「校内フリースクール」という新しい取り組みと「イエナプラン」という教育理念が、肯定的かつ一面的に解説されていることである。二つの概念について第１章第３節で確認したことのうち、従来の学校とは対照的に自由と個性が尊重されることは念入りに描かれていたものの、校内フリースクールを担当する優秀な人材の確保や、イエナプランの社会的で集団的な活動を重視している点など、不登校対策の懸念事項となる可能性がある部分は検証されなかった。

こうして『“不登校”44 万人の衝撃』における演出の傾向を振り返ると、弱者としての不登校生徒と、それを傷付けてしまっている現在の学校状況という両者間の問題を解消するために、二種の新しい対策方法を提供するという形で、不登校問題に対する制作者の認識と主張が分かりやすく展開されていることが読み取れる。さらには、映像とヴォイス・オーヴァーの相互作用

を通じて、不登校問題に対する解決策を論証していく様子は、第２章で論じたような解説的で説得的なドキュメンタリーの中に、『“不登校”44 万人の衝撃』が属しているということを示していた。

以上のように、本稿では不登校を主題として扱った一つのドキュメンタリーを分析し、その演出の特徴をつかむことができた。今後、不登校を題材にした複数の作品を詳しく比較しながら読み解いていくことができれば、不登校の表象に関する新しい発見があると考えている。それは、全ての映像作品に共通する演出の傾向かもしれないし、時代や制作者、映像作品の形式によって異なる演出の傾向かもしれない。さらに、それらの演出の傾向が不登校問題に関する学界の研究をいかに踏襲しているのか、もしくは全く新しい独自の見解に基づくものなのかということも考察する必要がある。一方で、『“不登校”44 万人の衝撃』は、基本的に解説型ドキュメンタリーであり、レトリック形式であったが、その他の形式のドキュメンタリーにおける不登校の表象を調査し、分析していくことも課題として残っている。

また、なぜ不登校問題は解決されなければならないのかという点を何度も吟味し、不登校問題の解決へ向けた議論もより深めていく必要があると考える。単なる不登校生徒数の減少のためではなく、不登校に苦しむ子供たちの人生や将来のために解決されなければならないのであれば、目の前の子供から苦しみを取り除こうという刹那的な形の学校変革を目指すだけでは不十分であるように感じられる。そもそも喜び、悲しみが繰り返される我々の時代の中で、辛いことは辛く、苦しいことは苦しいと、物の哀れを知るようにいかなる感情もありのままに受け入れることは可能であると子供達に伝え、そのような後ろ向きの感情も真心のままに大切にする日本社会になることで、不登校問題が抜本的に解決される日が来ると信じて待ちたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、大変な薫陶、訓導を賜りました板倉史明准教授に感謝申し上げます。

参考文献一覧

稲村博（1994）『不登校の研究』新曜社
岩本憲児、高村倉太郎監修（2008）『世界映画大事典』日本図書センター
奥地圭子（2005）『不登校という生き方 教育の多様化と子どもの権利』NHK 出版
熊井将太（2015）「異年齢学級教育の可能性と課題：イエナ・プランを中心に」『研究論　叢 第 3 部 芸術・体育・教育・心理］65 号、山口大学教育学部、53-66 頁
小泉英二（1973）『登校拒否』学事出版
佐藤修策（1996）『登校拒否ノート いま、むかし、そしてこれから』北大路書房
高木隆郎（1983）「登校拒否の理解」、内山喜久雄編『登校拒否』金剛出版、11 ～ 79 頁
高山龍太郎、荻野達史、川北稔、工藤宏司編（2008）『「ひきこもり」への社会学的アプローチ：メディア・当事者・支援活動』ミネルヴァ書房
東京シューレ編（2000）『フリースクールとはなにか―子どもが創る・子どもと創る』教育史料出版会
永田佳之（1996）『自由教育をとらえ直す：ニイルの学園＝サマーヒルの実際から」世織書房 .
永田佳之（2005）『オルタナティブ教育 国際比較に見る 21 世紀の学校づくり』新評論
新村出編（2018）『広辞苑（第七版）』岩波書店
丹羽美之（2020）『日本のテレビ・ドキュメンタリー』東京大学出版会
細谷俊夫ほか 3 名編（1992）『新教育学大事典　第 6 巻』第一法規出版
村尾泰弘編（2005）『ひきこもる若者たち（現代のエスプリ別冊 うつの時代シリーズ）』至文堂
村上聖一、東山一郎（2020）「資料で振り返る番組制作者 吉田直哉　残された数千点の番組関連資料から」『放送研究と調査』70 巻、5 号
森田洋司（1991）『不登校現象の社会学』学文社
山下慧、井上健一、松﨑健夫（2012）『現代映画用語事典』キネマ旬報社
渡辺位（1982）「現代の子どもにとっての学校とは」、小川捷之ほか編『シリーズ現代の子どもを考える　第 9 巻』共立出版
リヒテルズ・直子（2004）『オランダの教育』平凡社
ボードウェル・デヴィッド、クリスティン・トンプソン（1999）『フィルム・アート――映画芸術入門』名古屋大学出版会
ジョンソン , A.M. ほか 3 名共同執筆（佐藤淳一訳）（2018 年＝原著は 1941 年）『学校恐怖症』、『武庫川女子大学・学校教育センター年報』第 3 号

Branigan, Edward and Warren Buckland (ed.) (2014) *The Routledge Encyclopedia of Film Theory* London: Routledge

参考 URL 一覧

朝日新聞グローブ「「同じ中身を同じ学年で」は時代に合わない 「学級」を変えれば教育は変わる」(https://globe.asahi.com/article/12699615 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)
熊野東中学校ウェブページ (http://www.kuma7111.ec-net.jp/diary4.htm 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)
産経新聞 (那須慎一)「横浜の市立中、不登校児を学校で受け入れる「特別支援教室」で効果」
(https://www.sankei.com/article/20170117-NGCY5RJOQJINHP5SHUO2FPBFIY/ 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)
青年団「平田オリザ略歴」(http://www.seinendan.org/hirata-oriza/chronologic 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)
中国新聞「日米の中学生が熊野筆で絵手紙『夢』テーマ 筆の街交流館で展示会 広島」(https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=53772 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)
『テレビドラマデータベース』(http://www.tvdrama-db.com/ 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)
常石ともに学園「学校要覧」http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/shou-tsuneishi/img/TomoniPanf.pdf 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)
日本イエナプラン協会「イエナプランの始まりと発展」(https://japanjenaplan.org/jenaplan/roots/ 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)
日本財団「不登校傾向にある子どもの実態調査」(https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/information/2018/20181212-6917.html 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)
日本財団「「# 学校ムリかも」に集まった声を不登校経験者のしょこたんらが真剣にトーク」(https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2019/32222 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)
不登校新聞「NPO 法人全国不登校新聞社とは」(https://www.futoko.org/introduction/ 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)
文部科学省『令和 2 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要』(https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf 2023 年 1 月 1 日最終閲覧)
文部科学省「生徒指導資料第 1 集 (改訂版) 生徒指導上の諸問題の推移と これからの生徒指導 データに見る生徒指導の課題と展望」(https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/1syu-

kaitei/1syu-kaitei090330/1syu-kaitei.zembun.pdf 2023 年 1 月 1 日最終閲覧）
文部科学省「令和 2 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要」（https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf　2023 年 1 月 1 日最終閲覧）
文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 - 用語の解説」（https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/shidou/yougo/1267642.htm 2023 年 1 月 1 日最終閲覧）
文部科学省「今後の不登校への対応の在り方について（平成 15 年 3 月）」（https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1283839/www.mext.go.jp/b_menu/public/2003/03041134.htm 2023 年 1 月 1 日最終閲覧）
文部科学省「学校教育法（昭和二十二年三月二十九日法律第二十六号）」（https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317990.htm 2023 年 1 月 1 日 最終閲覧）
読売新聞「「東京シューレ」創設者、理事長を退任…スタッフの性暴力事件で責任問われる」（https://www.yomiuri.co.jp/national/20210624-OYT1T50249/ 2023 年 1 月 1 日最終閲覧）
読売新聞「平川氏に物言えぬ風土」（https://www.yomiuri.co.jp/local/hiroshima/news/20221223-OYTNT50120/ 2023 年 1 月 1 日最終閲覧）
NHK『シリーズ 子どもの “声なき声” 第 1 回「いじめと探偵 ～行き場を失った “助けて” ～」』（https://www.nhk.or.jp/special/detail/20190519.html 2023 年 1 月 1 日最終閲覧）

付録１：不登校現象が描かれたテレビドラマ作品一覧

（テレビドラマデータベース http://www.tvdrama-db.com/ 2023 年 1 月 1 日最終閲覧より ）

番号	制作年	題名	放送局	シリーズ	呼称	年齢	原因	他の症状	備考
1	1963	一番から三番まで	民放		ノイローゼ	中学 3 年生	受験	家出	・教育熱心な母親
2	1973	受験狂想曲	NHK	中学生日記	ノイローゼ（寸前）	中学生	テスト		・教育熱心な母親
3	1974	虚構の家	民放		登校拒否				
4	1976	立ち止まった時	NHK	中学生日記	（受験）ノイローゼ	中学 3 年生	受験		
5	1976	みんなが見ている	NHK	中学生日記	ノイローゼ	中学生	不明		
6	1976	ある登校拒否	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生	良い子でいることに疲れ		
7	1978	絶交宣言	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生	受験		
8	1979	二つの世界	NHK	中学生日記	ノイローゼ（気味）	中学生	勉強		
9	1979	二百二十日	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生	成績	家庭内暴力	・自然の力で直す（ママ）
10	1980	愛を病む	NHK		登校拒否	中学生	不明	家庭内暴力	
11	1980	心を病む子供達	民放	3 年 B 組金八先生 第 2 シリーズ	思春期心身症	高校生	不明		・軟禁療法
12	1982	若葉学習塾	民放		登校拒否				・学習塾に落ちこぼれや登校拒否の子供が集まる
13	1982	遠い道	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生	不明		
14	1982	季節が変わる日	民放		登校拒否				・片親（母親のみ）・子供を山中の塾へ預けようとする
15	1983	妻たちの思秋期	民放		登校拒否				
16	1984	探検ギャルが、かる～い気分で初体験！？見たなぁ？	民放	乙女学園男子部 どっきり双子先生	ノイローゼ（気味）				

17	1984	飛べない鳩	NHK	中学生日記	登校拒否（気味）	中学生	友達がいない		
18	1984	ガラスの家の暴力少女	民放		登校拒否症	小学生→中学生	不明	家庭内暴力	
19	1984	非行診療室	民放		登校拒否症	高校生			・問題児（ママ）に指導を行う
20	1984	折れたエンピツ	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生			・親に部活をやめさせられたことがきっかけに
21	1986	がけっぷちのメルヘン	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生	良い子でいることに疲れ		
22	1986	となりの空席	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生			
23	1986	清の秩父路オニ退治	民放	裸の大将	登校拒否				
24	1987	こころの冬	NHK	中学生日記	不登校	中学生			
25	1987	学校がこわい	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生	転校		・一過性
26	1988	冬の歌声	民放		登校拒否				・片親（父親）
27	1988	帰ってきた転校生	NHK	中学生日記	登校拒否（気味）	中学生	転校・友人関係		
28	1989	愛という名の暴力	NHK	中学生日記	登校拒否（ぎみ）	中学生	体罰・いじめ		
29	1989	家族病棟	民放		登校拒否				・精神治療が必要に
30	1989	ママハハ・ブギ	民放		引きこもり（気味）	仮面浪人生			・継母
31	1989	不登校 麻友美の場合	NHK	中学生日記	不登校	中学生	いじめ・教師の動作		
32	1989	清の湯けむり奮戦記	民放	裸の大将	登校拒否	小学生	いじめ		
33	1990	ネコノトピア・ネコノマニア	NHK	NHK スペシャル	登校拒否	高校生			
34	1990	私を海まで流して	民放		登校拒否				・父親の浮気（登校拒否との因果関係なし）
35	1990	さくら	NHK		登校拒否				・家族の崩壊
36	1990	卒業アルバム	民放	3 年 B 組金八先生スペシャルⅧ	不登校	中学生	塾へ行くため		

37	1991	傷だらけの翼	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生	いじめ		
38	1992	朝陽が目にしみる	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生	友人関係		
39	1993	清が湖で釣った夢	民放	裸の大将	閉じこもり（がち）	小学生			・母親が病死・自閉症
40	1993	春の一族	NHK		登校拒否	高校生			
41	1994	メンタルフレンド	NHK	中学生日記	不登校	中学生	厳しい父親	記憶喪失	
42	1994	信じるままに	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生	おとなしい自分を演じることに疲れ		
43	1995	友だちが欲しい	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生	新しいクラス		
44	1995	長続きしないオレ	NHK	中学生日記	不登校	中学生	いじめ（られたと感じ）		・いい加減・両親に甘やかされた
45	1996	ふたりぼっちの学校	NHK	中学生日記	登校拒否	中学生			・父親が家を出て、兄が荒れている
46	1996	学級通信 我が家の天使	NHK	中学生日記	不登校	中学生			
47	1996	遠い日の記憶	NHK	中学生日記	不登校	中学生	テスト		・一度登校する
48	1996	一日半の不登校	NHK	中学生日記	不登校	中学生	祖母の死		
49	1997	あなたに伝えられるもの	NHK	中学生日記	不登校	中学生	いじめ		
50	1997	戦友	民放		不登校				
51	1997	保健室	NHK	中学生日記	不登校	中学生	友人関係		・保健室登校
52	1997	校長がかわれば学校が変わる	民放		不登校	高校生			・不登校、非行等
53	1998	今が青春	NHK	中学生日記	不登校	中学生			
54	1998	おふくろに捧げる歌	民放	おふくろシリーズ	不登校				・ろう学校
55	1998	学校の挑戦	民放		不登校	高校生			
56	1998	素顔になれる場所	NHK	中学生日記	不登校	中学生	教師の叱責		・長女
57	1999	理由なき不登校	NHK	中学生日記	不登校	中学 2 年生	不明		

58	1999	シリーズ不登校 どうしてうちの子が…	NHK	中学生日記	不登校	中学生	親に完璧さを求められ		
59	1999	シリーズ不登校 待っててほしい	NHK	中学生日記	不登校	中学生	忙しい日常に疲れ		・通信制や定時制高校に興味を持つ
60	1999	シリーズ不登校 私はわたし	NHK	中学生日記	不登校	中学生			
61	1999	シリーズ不登校 冬芽	NHK	中学生日記	不登校	中学生			・元気が良かった
62	1999	キャッチボール日和	民放		登校拒否	中学 3 年生		自室に閉じこもり	
63	2000	心の旅 もう一人の私を演じたい	NHK	中学生日記	不登校	中学生			・ドキュメンタリー・フリースクール
64	2000	ONE NIGHT GANGS ワンナイト・ギャングス	民放	らぶ・ちゃっと	登校拒否	高校生			
65	2000	天使の居場所	民放		不登校				・フリースクール
66	2001	心の旅 揺れる想い〜15 歳 決断の冬〜	NHK	中学生日記	不登校	中学 3 年生			・山村留学
67	2001	シリーズさよなら名北中「あきらめる」ということ	NHK	中学生日記	登校拒否	中学 3 年生			
68	2001	TEAM	民放		不登校	中学生		家に引きこもり	
69	2002	シリーズ・先生と生徒 「青いレモンたち」	NHK	中学生日記	不登校	中学 3 年生	教師との衝突		・非行
70	2002	魔王ダンテ	民放		引きこもり（がち）	大学生			
71	2003	心の旅 ここが私の「居場所」？	NHK	中学生日記	不登校	中学生			・ドキュメンタリー
72	2003	俺たちの旅〜30 年目の運命	民放		登校拒否				
73	2004	悪夢の放課後	民放	人が殺意を抱くとき	登校拒否				・保護者と教師の対立
74	2005	保健室の金魚たち 保健室登校	NHK	中学生日記	不登校	中学生	不明	息苦しさ	・保健室登校
75	2005	鉄道警察官・走る捜査線	民放		不登校		不明		・非行

76	2005	ずっと逢いたかった。	民放		ひきこもり	大学生			
77	2005	きみの知らないところで世界は動く	NHK		引きこもり	中学 3 年生			
78	2006	パンチライン	民放		引きこもり	高校生			・頭脳明晰
79	2006	春 君に届く	民放		引きこもり	高校生			
80	2006	きみがいたから～「不登校を乗り越えられたのは」より～	NHK	中学生日記	不登校	中学生	部活動の成績不振		
81	2007	中庭登校 学校が嫌い！	NHK	中学生日記	不登校	中学 2 年生	なぜ学校に行くのかわからない		・中庭に登校する
82	2008	キャットストリート	NHK		不登校				・フリースクール
83	2009	14 歳	民放		引きこもり		教師との衝突		
84	2009	シリーズ中１ナビ	NHK	中学生日記	不登校	中学 1 年生	「おきて」に疲れて		
85	2009	今日という明日	NHK	中学生日記	不登校				・夜間登校
86	2009	命のバトン～最高の人生の終わり方	民放		不登校	高校生			・天真爛漫
87	2009	古代少女ドグちゃん THE ANCIENT DOGOO GIRL	民放		引きこもり	高校生			
88	2010	明日の光をつかめ	民放		ひきこもり				・更生施設
89	2010	見知らぬわが町	NHK		不登校	高校 1 年生			
90	2010	シリーズ「受験」空白のとき	NHK	中学生日記	不登校	中学 3 年生			
91	2011	シリーズ「卒業」旅立ちの日に ～僕たちのキズナ	NHK	中学生日記	不登校	中学 3 年生			
92	2011	あの日見た花の名前を僕たちはまだ知らない	民放		ヒキコモリ	高校生			・アニメ
93	2013	今日も地獄でお待ちしています	NHK		引きこもり	学生			
94	2013	あまちゃん	NHK		引きこもり（がち）	高校生	東京の生活についていけず		

95	2014	お父さんは高校生	NHK		不登校				
96	2014	GTO	民放		不登校	高校生			
97	2015	表参道高校合唱部！	民放		不登校	高校生			・スクールカースト
98	2015	あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。	民放		引きこもり	高校生			
99	2017	ショカツの女 13	民放		引きこもり				
100	2017	エロマンガ先生	民放		引きこもり				・アニメ
101	2017	天使の 3P!	民放		ひきこもり（気味）	高校生	過去のトラウマ		・アニメ
102	2017	ヒューマンミステリー 明日の約束	民放		不登校	高校生	いじめ	軽いうつ	
103	2018	人狼ゲーム ロストエデン	民放		登校拒否（気味）	高校 2 年生			
104	2018	チア☆ダン	民放		不登校（気味）	高校 2 年生			
105	2018	学校へ行けなかった私が「あの花」「ここさけ」を書くまで	NHK		ひきこもり	学生			
106	2020	恋する母たち	民放		引きこもり	高校生			
107	2021	ひきこもり先生	NHK		不登校	中学生	家庭環境、いじめ		・複数の不登校生徒・別室登校